

Sun Java Enterprise System 5 インストールガイド (Windows 版)



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 820-1788
2007 年 2 月

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、米国特許、および米国をはじめとする他の国々で申請中の特許が含まれています。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、docs.sun.com、Java、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および SunTM Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

目次

はじめに	11
1 Java ES インストールの準備	17
Java ES インストーラのしくみ	17
このリリースで使用される Java ES コンポーネント	18
インストーラのモード	18
言語の選択	19
セットアップタイプ	19
設定タイプとパラメータの設定	19
依存性の確認	20
アップグレード	21
インストールのログ	22
Java ES レポータ	22
アンインストール	23
ホストの準備が整ったかどうかの確認	23
システム要件	23
アクセス権	23
メモリーとディスク容量の要件	23
一般的なインストール前提条件の確認	24
Windows 版の配布内容	25
Java ES ソフトウェアの入手	27
2 インストールシーケンスの例	29
この章の利用方法	29
単一セッションインストールの例	30
評価の例	31
▼ Java ES 評価のシーケンスを作成する	31

Access Manager と Portal Server の例	32
Application Server のみをインストールする例	36
▼ Application Server をインストールする: シーケンスの例	36
Directory Proxy Server の例	37
▼ Directory Proxy Server をインストールする: シーケンスの例	37
Directory Server のみをインストールする例	38
▼ Directory Server をインストールする: シーケンスの例	38
Message Queue のみをインストールする例	39
▼ Message Queue をインストールする: シーケンスの例	39
Monitoring Console のみをインストールする例	40
▼ Monitoring Console をインストールする: シーケンスの例	40
Portal Server Secure Remote Access をインストールする例	41
▼ Portal Server Secure Remote Access をインストールする: シーケンスの例	41
Service Registry のみをインストールする例	43
▼ Service Registry をインストールする: シーケンスの例	43
Web Server のみをインストールする例	44
▼ Web Server をインストールする: シーケンスの例	44
コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例	45
▼ ホスト A を設定する: シーケンスの例	45
▼ ホスト B を設定する: シーケンスの例	46
アイデンティティ管理の例	47
▼ ホスト A をインストールする: シーケンスの例	48
▼ ホスト B をインストールする: シーケンスの例	48
Web とアプリケーションサービスの例	49
▼ Web とアプリケーションサービスをインストールする: シーケンスの例	49
リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例	51
▼ ホスト A をインストールする: シーケンスの例	51
▼ ホスト B をインストールする: シーケンスの例	51
3 グラフィカルインタフェースによるインストール	53
前提条件の確認	53
グラフィカルモードでのインストーラの実行	53
▼ インストールを開始する	53
▼ 「デフォルト」セットアップタイプでインストールする	56
▼ 「カスタム」セットアップタイプでインストールする	58

▼「インストール中に自動的に設定」インストールを開始する	60
▼「インストール後に手動で設定」インストールを開始する	62
インストールの取り消し	63
次の手順	63
4 サイレントモードでのインストール	65
サイレントインストールのイベント	65
▼サイレントインストールを実行する	66
応答ファイルの作成	66
▼インストーラを使用して応答ファイルを生成する	66
応答ファイルの編集	67
サイレントモードでのインストーラの実行	68
▼サイレントモードでインストーラを実行する	68
Setup.log ファイルの理解	69
次の手順	70
5 インストール後の設定の実行	71
この章の利用方法	72
Monitoring Console のインストール後の設定	72
Access Manager のインストール後の設定	73
▼ Web Server 上に Access Manager を設定する	73
「インストール中に自動的に設定」後の Access Manager の設定	73
「インストール後に手動で設定」操作後の Access Manager の設定	73
Application Server のインストール後の設定	74
▼ Application Server ロードバランスプラグインを設定する	74
Directory Proxy Server のインストール後の設定	75
▼「インストール後に手動で設定」での操作後に Directory Proxy Server を設定する	75
Directory Server のインストール後の設定	75
▼「インストール後に手動で設定」での操作後に Directory Server を設定する	75
▼「インストール後に手動で設定」での操作後に Directory Service Control Center (DSCC) を設定する	76
HADB のインストール後の設定	76
Java ES レポータのインストール後の設定	76
▼ Java ES レポータを有効または無効にする	76

Message Queue のインストール後の設定	77
Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定	77
「インストール中に自動的に設定」での操作後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定	78
▼ psadmin.bat を使用して Portal Server Secure Remote Access を設定する	78
▼ psconfig.bat を使用して SRA を設定する	79
▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Portal Server および Portal Server Secure Remote Access を設定する	80
Service Registry のインストール後の設定	80
Web Proxy Server のインストール後の設定	80
▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Web Proxy Server を設定する	81
Web Server のインストール後の設定	81
▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Web Server を設定する	81
Java 仮想マシンソフトウェアの設定	82
次の手順	82
6 インストールした Java ES コンポーネントの確認	83
Java ES の起動シーケンス	84
Access Manager の起動と停止	84
Application Server の起動と停止	84
▼ Application Server ドメインを起動する	85
▼ Application Server ドメインを停止する	85
▼ Application Server エージェントを起動する	85
▼ Application Server エージェントを停止する	85
Directory Server の起動と停止	86
▼ Directory Server を起動する	86
▼ Directory Server を停止する	86
Directory Proxy Server の起動と停止	86
▼ Directory Proxy Server を起動する	86
▼ Directory Proxy Server を停止する	87
HADB 管理エージェントの起動と停止	87
▼ HADB を「サービス」から停止する	87
Message Queue の起動と停止	88
▼ Message Queue を Windows の「スタート」メニューから起動する	88
▼ Windows サービスを使用して Message Queue を起動する	88
▼ Windows サービスを使用して Message Queue を停止する	88

Monitoring Console の起動と停止	89
Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス	89
▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップにアクセスする	89
Portal Server Secure Remote Access の起動と停止	90
▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイを起動する	91
▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイを停止する	91
Portal Server の起動と停止	91
▼ Portal Server を起動する	91
Web Proxy Server の起動と停止	93
▼ Proxy Administration Server サービスをコマンドプロンプトから起動する	93
▼ Proxy Admin Server サービスをコマンドプロンプトから停止する	93
▼ Proxy Server サービスをコマンドプロンプトから起動する	93
▼ Proxy Server サービスをコマンドプロンプトから停止する	93
▼ Socks Server サービスをコマンドプロンプトから起動する	94
▼ Socks Server サービスをコマンドプロンプトから停止する	94
▼ Proxy Admin Server サービスを「スタート」メニューから起動する	94
▼ Proxy Server サービスを「スタート」メニューから起動する	94
▼ Proxy Server サービスを「スタート」メニューから停止する	94
Web Server の起動と停止	95
▼ Web Server を Windows の「スタート」メニューから起動する	95
▼ Web Server を Windows の「スタート」メニューから停止する	95
▼ Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を起動する	95
▼ Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を停止する	96
▼ Windows サービスを使用して Web Server を起動する	96
▼ startserv.bat を使用して Web Server を起動する	97
▼ startserv.bat を使用して Web Server インスタンスを起動する	97
▼ Windows サービスを使用して Web Server を停止する	97
▼ stopserv.bat を使用して Web Server を停止する	97
▼ stopserv.bat を使用して Web Server インスタンスを停止する	98
次の手順	98
7 Java ES コンポーネントのアンインストール	99
アンインストーラのしくみ	99
アンインストーラの制限	99
相互依存関係の処理	100

前提条件の確認	101
Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認	102
Access Manager のアンインストール動作	102
Application Server のアンインストール動作	103
Directory Server のアンインストール動作	103
Message Queue のアンインストール動作	104
Monitoring Console のアンインストール動作	105
Portal Server のアンインストール動作	105
Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作	106
▼ SRA コンポーネントをアンインストールするには、次の手順に従いま す。	107
Service Registry のアンインストール動作	108
Web Proxy Server のアンインストール動作	109
Web Server のアンインストール動作	110
グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行	110
▼ Windows ウィザード/グラフィカルアンインストールプログラムを起動する ...	110
▼ 現在のインストール内容を変更する	111
▼ インストールされているすべてのコンポーネントを削除する	111
サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行	112
▼ サイレントモードでアンインストールを実行する	112
Java ES レポータのアンインストール	113
▼ Java ES レポータをアンインストールする	113
8 トラブルシューティング	115
一般的なトラブルシューティング方法	115
ネットワークの接続性	115
Directory Server の接続性チェック	116
インストール後の設定のチェック	116
リソースと設定のチェック	116
配布メディアのチェック	116
コンポーネントログファイルの検証	117
インストールログファイルの検証	117
▼ インストールログファイルを検証する	117
ファイルおよびディレクトリの削除	118
パスワードの確認	118

コンポーネントの依存関係の検証	118
インストールに関する問題	119
アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗	119
▼ 残されたファイルを削除する	119
Windows インストーラのエラー	120
サイレントインストールの失敗	120
サイレントインストールの失敗: 「応答ファイルに互換性がないか、破損している」	121
予期しない外部エラー	121
Java DB の再起動後、ポータルデータベースが見つからない	121
コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報	122
Access Manager のトラブルシューティングのヒント	122
Application Server のトラブルシューティングのヒント	123
Directory Server のトラブルシューティングのヒント	124
HADB のトラブルシューティングのヒント	124
Message Queue のトラブルシューティングのヒント	125
Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント	125
Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント	126
Portal Server のトラブルシューティングのヒント	126
Service Registry のトラブルシューティングのヒント	127
Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	127
Web Server のトラブルシューティングのヒント	128
トラブルシューティングの追加情報	128
 A このリリースの Java ES コンポーネント	129
Java ES コンポーネント	129
共有コンポーネント	130
 B デフォルトのディレクトリとポート	133
デフォルトのパスとファイル名	133
デフォルトのポート番号	134
 C 応答ファイルの例: サイレントインストール	137
応答ファイルの例	137

索引	139
----------	-----

はじめに

『Java Enterprise System インストールガイド (Windows 版)』には、Microsoft Windows オペレーティングシステムに Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールするために必要な情報が記載されています。

対象読者

このマニュアルに記載される内容は、Java ES ソフトウェアをインストールする評価担当者、システム管理者、およびソフトウェア技術者を対象としています。このマニュアルは、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品のインストール
- サポートする Java ES プラットフォーム上のシステム管理とネットワーキング

Java ES のマニュアルセット

Java ES のマニュアルセットでは、配備計画やシステムインストールについて説明しています。システムマニュアルの URL

は、<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1572.1> です。Java ES の概要については、次の表に示されている順序で各マニュアルを参照してください。

表 P-1 Java ES のマニュアル

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (Windows 版)』	既知の問題など、Java ES に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネントごとにリリースノートがあります。
『Sun Java Enterprise System 5 技術の概要』	Java ES の技術的および概念的な基礎について説明します。コンポーネント、アーキテクチャ、プロセス、および機能について説明しています。

表 P-1 Java ES のマニュアル (続き)

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java Enterprise System 5 配備計画ガイド』	Java ES に基づくエンタープライズ配備ソリューションの計画および設計について説明しています。配備計画と設計についての基本概念と原則およびソリューションライフサイクルについて説明するとともに、Java ES に基づくソリューションを計画する上で役立つ高レベルの例と戦略を示しています。
『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』	ハードウェア、オペレーティングシステム、ネットワークの各側面に関する Java ES 配備の実装仕様を作成する際に役立ちます。コンポーネントの依存性など、インストールおよび設定の計画で対処すべき問題について説明します。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールガイド (Windows 版)』	Microsoft Windows オペレーティングシステムに Java ES をインストールするプロセスを、順を追って説明しています。また、インストール後にコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正常に機能するかどうかを確認する方法についても説明します。
『Sun Java Enterprise System 用語集』	Java ES マニュアルで使用される用語について説明します。

コミュニケーション製品

Sun Microsystems は、Sun Java Enterprise System の権利からコミュニケーション製品を除外することを決定しました。

現在の release 5 から、コミュニケーション製品は Sun Java Communications Suite の一部として、または個別の製品として入手していただくことになります。今後、コミュニケーション製品が Java Enterprise System インストーラからインストールされることはありません。

該当するコミュニケーション製品は次のとおりです。

- Sun Java System Messaging Server
- Sun Java System Calendar Server
- Sun Java System Instant Messaging

この権利の変更は、以前に出荷された Java Enterprise System 2005Q4 のコミュニケーション製品には影響しません。コミュニケーション製品をすでにインストールしている場合は、現在の権利に変更はありません。

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-2 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
<i>aabbcc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャー・ユーザーズガイド』を参照してください。
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

■ Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

コマンド例のシェルプロンプト

次の表に、デフォルトのシステムプロンプトおよびスーパーユーザーのプロンプトを示します。

表 P-3 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
UNIX システムの C シェル	machine_name%
UNIX システムの C シェルのスーパーユーザー	machine_name#
UNIX システムの Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
UNIX システムの Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Microsoft Windows のコマンド行	C:\

符号の表記規則

次の表に、このマニュアルで使用する記号の表記規則を示します。

表 P-4 表記上の規則

表記	説明	例	意味
[]	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{ }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションには y 引数か n 引数のいずれかを使用する必要があります。
\${ }	変数の参照を示します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。
-	同時に押すキーを示します。	Control-A	Control キーを押しながら A キーを押します。
+	順番に押すキーを示します。	Ctrl+A+N	Control キーを押してから放し、それに続くキーを押します。
→	グラフィカルユーザーインターフェースで選択するメニュー項目を示します。	「ファイル」→「新規」 →「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから「テンプレート」を選択します。

Sun のオンラインリソースへのアクセス

docs.sun.com Web サイトでは、Sun の技術文書にオンラインでアクセスできます。docs.sun.com アーカイブをブラウズすることも、特定のマニュアルのタイトルまたは主題を検索することもできます。マニュアルは、PDF および HTML 形式のオンラインファイルとして利用できます。どちらの形式でも、障害をもつユーザーのための支援技術により読み取り可能です。

次の Sun のリソースにアクセスするには、<http://www.sun.com> をご覧ください。

- Sun 製品のダウンロード
- サービスおよびソリューション
- サポート (パッチおよびアップデートを含む)
- トレーニング
- 研究
- コミュニティー (Sun Developer Network など)

サードパーティーの Web サイト

このマニュアルに掲載されているサードパーティーの URL を参照すると、追加および関連情報を入手できます。

注- このマニュアル内で述べられるサードパーティーの Web サイトが、現在利用できるかどうかについて Sun は責任を負いません。こうしたサイトやリソース上またはこれらを通じて利用できるコンテンツ、広告、製品、その他の資料について Sun は推奨しているわけではなく、Sun はいかなる責任も負いません。また、このようなサイトやリソース上で、またはサイトやリソースを通じて利用できるコンテンツ、製品、サービスの使用または依存を原因として、または使用や依存に関連して生じた、または生じた疑いのある実際の損傷や損失、あるいは損傷や損失の疑いのあるものに対して Sun は責任を負いません。

ユーザーからのご意見

Sun は当社のマニュアルの改善のために、ユーザーからのご意見ご提案を受け付けています。ご意見をいただくには、<http://docs.sun.com> のページから「コメントの送信」をクリックしてください。オンラインフォームに完全な文書のタイトルとパーツ番号を入力してください。パーツ番号はこのマニュアルの表紙またはマニュアルの URL に示されている 7 桁か 9 桁の数字です。たとえば、このマニュアルのパーツ番号は 820-1788 です。

Java ES インストールの準備

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする際に役立つ情報を提供します。このマニュアルで説明している作業を開始する前に、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』に従ってインストール計画を立てておいてください。付録 B にある、Java ES インストールに関連する参考資料にも精通するようにしてください。

この章の内容は次のとおりです。

- 17 ページの「Java ES インストーラのしくみ」
- 23 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」
- 24 ページの「一般的なインストール前提条件の確認」
- 25 ページの「Windows 版の配布内容」
- 27 ページの「Java ES ソフトウェアの入手」

Java ES インストーラのしくみ

Sun Java Enterprise System (Java ES) は、多くの Sun のサーバー側製品を 1 つのソフトウェアシステムに統合し、分散型のエンタープライズアプリケーションのサポートに必要なサーバーソフトウェアを提供します。このマニュアルでは、これらの製品を「Java ES 製品コンポーネント」と呼びます。1 つのインストーラで、Java ES 製品コンポーネントおよび共有コンポーネントをさまざまな組み合わせでインストールできます。これらのコンポーネント間には複雑な相互関係が存在するため、それらをインストールする際には、単一の Java ES コンポーネントをインストールする場合よりも多くのインストール前作業やインストール後作業が必要となります。

このリリースで使用される **Java ES** コンポーネント

このリリースの Java ES ソフトウェアに含まれる、選択可能な Java ES コンポーネントは次のとおりです。名前とバージョンのあとに、このマニュアルで使用する省略名を示します。

- Access Manager 7.1
- Application Server 8.2 Enterprise Edition (Application Server)
- Directory Proxy Server 6.0
- Directory Server Enterprise Edition 6.0 (Directory Server)
- High Availability Session Store 4.4 (HADB)
- Message Queue 3.7 UR1
- Monitoring Console 1.0
- JavaDB 10.2
- Portal Server 7.1
- Portal Server Secure Remote Access 7.1
- Service Registry 3.1
- Web Proxy Server 4.0.4
- Web Server 7.0

Java ES インストーラに表示されるサービスおよびサブコンポーネントの完全な一覧については、[付録 A](#) を参照してください。この付録では、今回のリリースで提供する共有コンポーネントの一覧も示します。

インストーラのモード

Java ES Windows インストーラでは、MSI (Microsoft Windows Installer) フレームワークを使用して、Java ES システムをホスト上にインストールします。Java ES ソフトウェアのインストールは、対話的に実行することも、再利用可能なスクリプトを使用して実行することもできます。

- グラフィカルモード (対話式): グラフィカルワークステーションへの Java ES ソフトウェアのインストール作業の手順を示す、対話式のグラフィカルウィザードを提供します。
- サイレントモード: 複数のホスト上でインストーラを実行するオプションを提供します。インストーラへの入力を指定するために作成した応答ファイルを毎回使用します。サイレントモードでのインストールの場合、まずウィザードによりインストーラを実行しながら、名前と値のペアのセットを応答ファイルに保存します。サイレントモードインストールの詳細については、[第 4 章](#) を参照してください。

言語の選択

Java ES インストーラでは、Java ES の多言語パッケージをインストールできます。次の言語を利用できます。

- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- 日本語
- 韓国語
- スペイン語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語

インストーラのデフォルトでは、Java ES が英語で自動的にインストールされます。

セットアップタイプ

Java ES インストーラでは、次のいずれかのセットアップタイプを選択できます。

- デフォルト: 「デフォルト」 セットアップタイプを選択すると、すべての Java ES コンポーネントがインストールおよび設定されます。
- カスタム: 「カスタム」 セットアップタイプを選択すると、インストールする Java ES コンポーネントを選択できます。

設定タイプとパラメータの設定

多くの Java ES コンポーネントでは、選択する Java ES コンポーネントおよびインストールタイプによって、インストール時にある程度の設定が必要になります。

インストーラで、次の設定タイプを使用できます。

- インストール中に自動的に設定: 単一のホスト上でコンポーネントを評価する場合に使用します。インストール時に、インストール中の設定が可能なコンポーネントを設定できます。

このモードでは、ポート番号などの設定パラメータは、事前に決定されたデフォルト値になり、インストール終了時に提示されます。これらのデフォルト値が、コンポーネントの設定に使用されます。

注- 管理者ユーザー ID とパスワードには特殊文字を使用できません。また、パスワードは 8 文字以上にするようにしてください。

- インストール後に手動で設定: このオプションでは、ソフトウェアコンポーネントを所定のディレクトリに配置するために必要な最小限の値のみをインストール中に指定します。設定は、インストール後に実行されます。

このオプションの場合は、管理者設定ダイアログボックスは表示されません。インストール時にはファイルのコピーのみが行われます。適切な値を使用して、プロパティファイルを手動で編集します。プロパティファイルの編集方法の詳細については、[第5章](#)を参照してください。

コンポーネントがほかのコンポーネントに依存する場合は、依存するコンポーネントを先に設定するようにします。

選択する設定オプションによっては、インストール中に管理者 ID とパスワードの入力を要求される場合があります。たとえば、ほとんどのコンポーネントには管理者ユーザー ID およびパスワードを指定する必要があります。これらの共通の値を設定することにより、すべてのコンポーネントの管理者ユーザー ID とパスワードのデフォルト値を設定することになります。

注-Java ES コンポーネントのマルチセッションインストールでは、最初のセッションインストールで選択した設定モード(「インストール中に自動的に設定」または「インストール後に手動で設定」)が後続のセッションのデフォルトとして採用され、設定選択モード画面は表示されません。

依存性の確認

Java ES コンポーネントの多くは、主要な機能を提供するために、ほかのコンポーネントの存在に依存しています。インストール時に選択した Java ES コンポーネントが共存して正常に機能するように、インストーラはコンポーネント間のチェックを広範囲に行います。このため、コンポーネントを選択する際に、特定の Java ES コンポーネントをインストールに含めるようにインストーラから求められる場合があります。

Java ES インストーラでは、次の規則を使用して Java ES コンポーネント間の依存性を処理します。

- **Java ES コンポーネントの選択:** インストールする Java ES コンポーネントを選択すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントを自動的に選択します。
また、インストーラは、選択したコンポーネントが依存するコンポーネントとサブコンポーネントも選択します。たとえば、Application Server を選択すると、インストーラは Message Queue を自動的に選択します。
- **Java ES コンポーネントの選択の解除:** Java ES コンポーネントの選択を解除すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントの選択を自動的に解除します。

選択している別のコンポーネントがローカルまたはリモートに必要とするコンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。

- **サブコンポーネントの選択:** サブコンポーネントを選択すると、インストーラはそのサブコンポーネントが属する Java ES コンポーネントを自動的に選択しますが、その他のサブコンポーネントは選択しません。

選択したサブコンポーネントがほかのコンポーネントまたはサブコンポーネントに依存する場合、依存関係にあるこれらのコンポーネントは自動的に選択されます。

- **サブコンポーネントの選択の解除:** サブコンポーネントの選択を解除すると、インストーラはそのサブコンポーネントの選択のみを解除します。そのほかのサブコンポーネントの選択は解除しません。

選択している別のコンポーネントがローカルまたはリモートに必要とするサブコンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。

アップグレード

Java ES インストーラを使用してコンポーネントの新規インストールを実行することによって、Java ES コンポーネントはアップグレードされます。この場合の新規インストールは、最初に以前のバージョンのパッケージを削除してから、同じパスに Release 5 をインストールすることで実行されます。



注意 - 同じホストに2つの異なるバージョンの Java ES をインストールしないでください。

以前のバージョンの設定データを新しいインストールに移行するか、新規に設定するか、両方を組み合わせて行うことにより、コンポーネントを再設定します。一部の Java ES コンポーネントには、コンポーネントの再設定または設定データの移行を行うユーティリティーが提供されています。

Java ES 5 Windows インストーラでは、以前のバージョンのコンポーネントのイン-place アップグレードをサポートしていません。その代わりに、Java ES 4 との共存はサポートされています。Java ES 5 のインストール後、Java ES コンポーネントをアップグレードするには、『Sun Java Enterprise System 5 Upgrade Guide for Microsoft Windows』で説明されているアップグレード手順に従う必要があります。個々のコンポーネントのアップグレードシナリオについては、それぞれのアップグレードガイドを参照してください。

Java ES 5 をインストールしようとする、インストーラは最初に、システムに Java ES 4 が存在するかどうかを調べます。Java ES 4 が検出されると、インストーラは、Windows SYSTEM ディレクトリに Java ES 4 共有コンポーネントが以前から存在してい

るかどうかチェックします。これは、それらのコンポーネントが Java ES 5 との間で非互換性の問題を引き起こすからです。それら共有コンポーネントのいずれかが Java ES 4 のサービスで使用されている場合は、実行中の Java ES 4 サービスを停止するように求められます。

さらに、インストーラは Java ES 4 共有コンポーネントの名前を自動的に変更します。名前の変更情報は、インストーラのログファイルに格納されます。Java ES 4 のサービスを開始する必要がある場合は、共有コンポーネントの名前を手動で復元するようにしてください。

注 - Java ES 4 と Java ES 5 のサーバーを同時に起動することはできません。

インストールのログ

インストールまたはアンインストールの実行中に、実行される処理のログレコードが生成されます。これらのレコードは、`%Temp%\SUNJavaES.log` にある単一のファイルに保存されます。

Java ES レポータ

Java ES レポータは、対話式の Java ES インストールセッションが正常に完了後、匿名の製品登録を実行するコマンド行ユーティリティです。Java ES コンポーネントがインストールされるとすぐに、レポータのインストールが開始されます。コマンド行で、レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを入力することを求められます。インストールはメッセージを表示せずに続行され、それ以上の操作は必要ありません。

レポータをインストールしない場合は、Java ES インストールセッションの起動時に、インストーラコマンドに `-noreporter` オプションを指定できます。`-noreporter` オプションの使用後、または Java ES のサイレントインストール後に、レポータのみをインストールします。

レポータのインストール後、設定ファイルを編集してレポータを有効または無効にすることができます。これらの手順は、[76 ページの「Java ES レポータのインストール後の設定」](#)に記載されています。レポータはインストーラの Java ES コンポーネントではないため、Java ES アンインストーラを使用してアンインストールできません。レポータをアンインストールする手順は、[113 ページの「Java ES レポータのアンインストール」](#)に記載されています。

アンインストール

すべての製品の設定は、製品がアンインストールされる前に削除されます。設定を削除するために使用されるスクリプトは、アンインストールプログラムに組み込まれています。「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「プログラムの追加と削除」を選択するか、アンインストールプログラムをサイレントモードで実行すると、Java ES システムをアンインストールできます。

ホストの準備が整ったかどうかの確認

インストーラを起動する前に、この項で説明する問題を確認します。

システム要件

Java ES をインストールする前に、システム内のホストがハードウェアとオペレーティングシステムの最小要件を満たしていることを確認します。サポートされているプラットフォーム、ソフトウェア要件、およびハードウェア要件に関する最新情報については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (Windows 版)』の「Hardware and Software Requirements」を参照してください。

また、システムに適切なホスト名とドメイン名を設定するようにしてください。ネットワークからシステムに ping するために、システムには静的 IP アドレスも割り当てるようにしてください。

ホストに実装されているオペレーティングシステムが Java ES の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは処理を中断します。インストール前に、この問題を解決する必要があります。

アクセス権

Java ES ソフトウェアをインストールするには、管理者または管理者権限を持つユーザーとしてログインします。特権ユーザーは、ローカル管理グループに属します。入れ子になったグループ内のユーザーは、特権ユーザーとは見なされません。たとえば、管理グループに属するグループ内のユーザーは、特権ユーザーと見なされません。

メモリーとディスク容量の要件

Java ES インストーラを実行するには、Windows システムドライブに 500M バイトのディスク容量、インストール先のドライブに 1.5G バイトのディスク容量が必要です。

選択したコンポーネントが必要とするメモリーとディスク容量が十分であるかどうかについて、インストーラはホストを検証します。

- ホスト上のメモリーが Java ES の推奨要件を満たしていない場合でも、インストーラは警告メッセージを表示するだけで、インストールの続行は許可します。
- ホストのディスク容量が不足している場合は、インストーラは処理を中断します。この問題を解決してからインストールを再開する必要があります。
この問題は、%TEMP% を必要な量の空き領域があるほかのドライブにマッピングすると解決できます。

一般的なインストール前提条件の確認

次の表は、すべての種類のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、右の列は、手順の参照先と便利なその他の情報を示しています。すべてのインストールですべてのタスクが必要なわけではありません。

表1-1 インストール前のチェックリスト

タスク	便利な情報と参照先
1. Java ES のインストールを計画します。	『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』を参照してください。
2. Java ES で有効なバージョンの Java 2 Standard Edition (J2SE™) がホストにインストールされていることを確認します。	ホストに J2SE 1.5_09 以降が見つからない場合、インストーラは C:\Java ディレクトリに J2SE をインストールします。
3. インストールに影響する問題がリリースノートに記載されていないか確認します。	インストールガイドの手順を実行する前に、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (Windows 版)』をお読みください。このリリースノートには、個別の配備に関するインストール時の問題についての情報が記載されています。
4. システム要件が満たされていることを確認します。	23 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」を参照してください。
5. 使用可能なインストールシーケンス例が存在するか確認します。	第 2 章を参照してください。
6. すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存する Java ES コンポーネントをインストールする場合は、既存のサーバーおよびサービスがアクセス可能であることを確認します。	たとえば、Portal Server Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Secure Remote Access コアが稼働し、アクセス可能である必要があります。

表 1-1 インストール前のチェックリスト (続き)	
タスク	便利な情報と参照先
7. 使用しているドライブが NTFS ドライブであることを確認します。	Windows オペレーティングシステム上に Java ES をインストールする場合は、インストールドライブを NTFS ドライブにするようにしてください。
8. ファイアウォールサービスを停止します。	ホストシステムで実行されているファイアウォールがある場合は、ファイアウォールサービスを無効化および停止して、ホストシステムを再起動します。再起動後、ファイアウォールサービスが無効になっていることを確かめてください。 Java ES 5 のインストールが完了すれば、停止したファイアウォールサービスを再起動できます。

Windows 版の配布内容

次の表に、Java ES ソフトウェアの配布内容の一覧を示します。

表 1-2 Windows 版の配布内容

配布内容	含まれる内容	バンドル名
Windows プラットフォーム	すべての Java ES コンポーネントおよび共有コンポーネント インストーラ アンインストーラ	java_es-5-ga-windows-x86.zip

表 1-2 Windows 版の配布内容 (続き)		
配布内容	含まれる内容	バンドル名
Application Server Suite	Access Manager	java_es-5-appsuite-ga-windows-x86.zip
	Application Server	
	Directory Server	
	HADB	
	Java DB	
	Message Queue	
	Portal Server	
	Portal Server Secure Remote Access	
	Service Registry	
	Monitoring Console	
	Web Proxy Server	
	Web Server	
	すべての共有コンポーネント	
	インストーラ	
	アンインストーラ	
Access Manager Suite	Access Manager	java_es-5-identsuite-ga-windows-x86.zip
	Application Server	
	Directory Server EE (Directory Server および Directory Proxy Server を含む)	
	HADB	
	Java DB	
	Message Queue	
	Monitoring Console	
	Web Server	
	すべての共有コンポーネント	
	インストーラ	
	アンインストーラ	

表 1-2 Windows 版の配布内容 (続き)

配布内容	含まれる内容	バンドル名
Web Server Suite	Access Manager Application Server Directory Server EE (Directory Server およ び Directory Proxy Server を含む) HADB Java DB Message Queue Monitoring Console Service Registry Web Proxy Server Web Server すべての共有コン ポーネント インストーラ アンインストーラ	java_es-5-websuite-ga-windows-x86.zip

Java ES ソフトウェアの入手

Java ES ソフトウェアは、次のいずれかの方法で入手できます。

- **Web** ダウンロード

Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) から、Java ES ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。次の形式で入手できます。

- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む ISO DVD セットイメージ
- 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ
- スイート用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ

- **DVD**

<http://www.sun.com/software/javaenterprisesystem/index.html> またはご購入先から、DVD を含むメディアキットを入手できます。各 DVD には、単一オペレーティングシステム用のインストールファイル、Java ES インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネントパッケージが収録されています。

インストールシーケンスの例

この章では、一般的な Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストールシーケンスのガイドラインについて説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 29 ページの「この章の利用方法」
- 30 ページの「単一セッションインストールの例」
- 45 ページの「コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例」
- 47 ページの「アイデンティティ管理の例」
- 49 ページの「Web とアプリケーションサービスの例」
- 51 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」

この章の利用方法

この章のインストールシーケンスの例は、一般的な Java ES インストールを実行するための大まかなガイドラインです。これらによって、特定の配備シナリオを実装するために必要な一連の手順を理解できます。

単一セッションの例では、単一ホストに、単一インストールセッションで1つまたは複数の Java ES コンポーネントをインストールする代表的な手順について説明します。これには評価の例が含まれます。残りの例では、さまざまなソリューションのために、複数ホストで、複数インストールセッションを実行する状況について説明します。この章のシーケンスは、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』に示す Java ES コンポーネント間の依存関係に基づいています。

コンポーネントの選択では、Java ES インストーラは、コンポーネントの互換性のないバージョンと要件に適合しないバージョンを識別します。問題が識別されると警告メッセージが出力され、対処する必要がある内容が示されます。それらのメッセージには、すでにローカルホストにインストールされているコンポーネント

の一部またはすべての互換性のないバージョンについての情報も示されます。すでにインストールされているコンポーネントを調べるために、Java ES インストーラを使用することもできます。

ヒント-インストーラを起動する前に、互換性のないバージョンの Java ES コンポーネントを削除またはアップグレードします。

表 2-1 インストールシーケンスのガイドライン

インストールガイドラインのトピック	説明
監視	Monitoring Console は、監視する Java ES コンポーネントと同じホスト上では実行できません。そのため、Monitoring Console は別のホストに別のインストールセッションとしてインストールしてください。
インストール時の設定	次のコンポーネントは、「インストール中に自動的に設定」でインストールできますが、インストール中に設定を行うことはできません。Monitoring Console および Service Registry。
リモートコンポーネント	リモート Java ES コンポーネントを使用して依存性の要件を満たす場合は、そのリモートコンポーネントに依存する Java ES コンポーネントをインストールする前に、リモート Java ES コンポーネントをインストールし、稼働しておく必要があります。
Access Manager のモード	Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、Portal Server をインストールしない場合にのみ使用できます。

単一セッションインストールの例

次の例は、単一セッションで、単一ホストにインストールする場合に適用されません。

- 31 ページの「評価の例」
- 32 ページの「Access Manager と Portal Server の例」
- 36 ページの「Application Server のみをインストールする例」
- 37 ページの「Directory Proxy Server の例」
- 38 ページの「Directory Server のみをインストールする例」
- 39 ページの「Message Queue のみをインストールする例」
- 40 ページの「Monitoring Console のみをインストールする例」
- 41 ページの「Portal Server Secure Remote Access をインストールする例」
- 43 ページの「Service Registry のみをインストールする例」

- 44 ページの「Web Server のみをインストールする例」

評価の例

評価インストールは、一般に、短時間で配備をテストする方法と考えられています。この例では、グラフィカルインタフェース、カスタムインストール、および「インストール中に自動的に設定」オプションを使用します。設定のページが表示されたら、可能なかぎりデフォルト値を受け入れます。

この例では、すべての Java ES コンポーネントをインストールして、Web コンテナとして Web Server を使用します。

▼ Java ES 評価のシーケンスを作成する

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 Java ES グラフィカルインストーラを起動します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
Java ES インストーラでは、次の2つのタイプのインストールを実行できます。
デフォルト Web Server を Web コンテナとして、すべての製品を自動的に選択および設定します

カスタム Java ES コンポーネントを選択できます
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションを選択します。
インストール時に設定できない Java ES コンポーネントを示すメッセージが表示されます。
- 6 コンポーネントを選択する際、すべてインストールするよう選択します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 7 インストールディレクトリを確認します。
- 8 デフォルト設定がある場合は、それを受け入れます。

- 9 インストールサマリーとログを表示します。
- 10 インストール後の設定を完了します。
インストール後の設定の手順については、[第 5 章](#)を参照してください。
- 11 Java ES コンポーネントを起動します。

Access Manager と Portal Server の例

この例では、単一ホストの Access Manager で、Web コンテナとして Web Server を使用して、Portal Server をインストールします。Portal Server と Access Manager で同じ種類の Web コンテナを使用してください。

アイデンティティ管理およびポリシーコアサービス、Access Manager 管理コンソール、および連携の共有ドメインサービスを異なるホスト上で使用する場合は、これらの Access Manager サブコンポーネントの選択を解除します。

ハードウェアおよびオペレーティングシステムの要件

次の表に、ハードウェアおよびオペレーティングシステムの要件を示します。

表 2-2 ハードウェアおよびオペレーティングシステムの要件

コンポーネント	プラットフォーム要件
オペレーティングシステム	Windows XP
RAM	Sun Java System Web Server 上への正規の配備用に 1.5G バイト。 Sun Java System Application Server 上への正規の配備用に 2.0G バイト。
ディスク容量	Portal Server および関連するアプリケーション用に 2G バイト

ソフトウェア要件

Portal Server には次のスタックコンポーネントが必要です。

- Sun Java System Directory Server 6
- レルムモードではなく旧バージョンモードでインストールされた Sun Java System Access Manager 7。

Portal Server のインストールと設定には、Access Manager、Directory Server、および Web コンテナが必要です。新規インストールを実行する場合は、Portal Server をインストールする前に Access Manager と Directory Server をインストールする必要があります。Access Manager、Directory Server、および Portal Server は同時にイン

ストールできます。Access Manager と Directory Server がすでにインストールされている場合は、Portal Server のインストールと設定を既存の Directory Server および Access Manager サーバーに対して行います。

- Sun Java System Web Server 6.x または Sun Java System Application Server 8.x。

注 - Portal Server 7.1 をインストールする前に、Access Manager を旧バージョンモードでインストールする必要があります。

前提条件

Portal Server をインストールする前に次の点を確認します。

- JAVA_HOME が最新バージョンの JDK に設定されている。
- Portal Server のインストールに使用するホストに、ドメイン名とホスト名が設定されている。

▼ ホスト名とドメイン名を設定する

- 1 「マイ コンピュータ」アイコンを右クリックします。
- 2 システムの「プロパティ」ウィンドウで「コンピュータ名」タブをクリックします。
- 3 「変更」をクリックし、コンピュータ名を入力します。
このコンピュータ名が、ホストのホスト名になります。
- 4 「詳細」をクリックして、ドメイン名を入力します。たとえば、red.ipplanet.com と入力します。
- 5 「OK」をクリックして、変更を保存します。
- 6 ホストを再起動します。
- 7 ホスト名およびドメイン名が設定されていることを確認します。
 - a. コマンドプロンプトで `hostname` と入力します。
ホスト名が表示されます。
 - b. コマンド行インタフェースで `ping hostname` と入力します。
実行結果に `hostname.domainname` が表示されます。

Portal Server のインストール

このタイプのインストールの一般的な手順には、次のものがあります。

▼ Portal Server をインストールする

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 Java ES インストーラを実行します。
- 4 ライセンス契約に同意し、インストール先のフォルダを選択します。
- 5 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 6 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 7 コンポーネントの選択で、**Portal Server** と **Web Server** を選択します。
Access Manager と Directory Server は自動的に選択されます。インストーラから
Directory Server と Access Manager の選択を解除することはできません。Directory
Server と Access Manager をインストールするように指定します。

注 - 「インストール中に自動的に設定」オプションのインストール、および評価設定モードのインストールでは、リモートサーバーはサポートされません。「インストール後に手動で設定」オプションを選択して、インストール後にリモートサーバーを手動で設定する必要があります。

- 8 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。

- 12 Java ES コンポーネントを起動します。
- 13 デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port /amserver`

▼ インストール後の手順

- 詳しくは、[91 ページの「Portal Server を起動する」](#)を参照してください。

Portal Server のアンインストール

Portal Server をアンインストールするには、次の手順に従います。

▼ Portal Server をアンインストールする

- 1 ホストを再起動することにより、すべての **Java ES 5** コンポーネントを確実にシャットダウンします。
- 2 インストール先フォルダを削除します。
デフォルトでは、Java ES 5 は C:\Program Files\Sun\JavaES5 フォルダにインストールされます。
- 3 **Java ES 5** およびサービスエントリのレジストリエントリをクリーンアップします。



注意 - Java ES に関連するレジストリエントリを削除する必要があります。

- a. コマンドプロンプトから `regedit.exe` を実行します。
- b. `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Sun Microsystems\` の場所に移動し、このキーの下にあるすべてのキーを削除します。たとえば、**Access Manager**、共通エージェントコンテナなどです。
- c. レジストリ内の次の場所に移動します。
`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\Uninstall`
- d. エントリをスクロールしながら、右側のキー値を確認します。エントリは、`"{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}"` のようになります。右側の値は、`"Sun Java Enterprise System 5"` になります。
`"{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}"` や
`"InstallShield_{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}"` のような、一致するエントリを持つキーを削除します。

- e. レジストリ内の次の場所に移動します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\

- f. 次のキーを削除します:Common_Agent_Container_2_864cfa27_default、
HADB4.4MgmtAgent、MQ3.7UR1_Broker、および Web Console 3.0.2 console。

- g. レジストリ内の次の場所に移動します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Eventlog\Application

- h. JavaService キーおよび Web Console 3.0.2 console キーを削除します。

- i. レジストリ内の次の場所に移動します。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Enum\Root\

次のキーを選択します:LEGACY_HADB4.4MGMTAGENT。

注-デフォルトでは、管理者にはEnum\Root 下のキーを削除するアクセス権がありません。「編集」->「アクセス許可」をクリックし、Everyone ユーザーに「フルコントロール」オプションを選択してください。

- j. LEGACY_HADB4.4MGMTAGENT キーを削除します。

- k. 同じようにして次のキーを削除します:LEGACY_MQ3.7UR1_BROKER および
LEGACY_WEB_CONSOLE_3.0.2_CONSOLE。

- 4 ホストを再起動します。

Application Server のみをインストールする例

この例では、Application Server を単独でインストールします。

▼ Application Server をインストールする:シーケンスの例

始める前に Application Server は、Message Queue のローカルインストールが必要です。負荷分散を使用する場合は、Web Server のローカルインストールが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。

この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。

- 2 インストールの前提要件をチェックします。

開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。

- 3 Java ES インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 6 コンポーネントの選択で、**Application Server**を選択します。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールディレクトリを確認します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。
- 12 **Application Server**を起動します。これにより **Message Queue**は自動的に起動されます。

Directory Proxy Server の例

この例では、単一ホストで、Directory Server とともに Directory Proxy Server をインストールします。

注 - 評価の場合を除いて、Directory Proxy Server は、Directory Server がインストールされているシステムにインストールしないでください。

▼ Directory Proxy Server をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。

- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 コンポーネントの選択で、**Directory Proxy Server** を選択します。
Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、インストール後の設定の際にリモートコピーを指定します。
- 6 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 7 インストールディレクトリを確認します。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します。
- 10 インストール後の設定を完了します。
- 11 まず **Directory Server** を起動し、それから **Directory Proxy Server** を起動します。

Directory Server のみをインストールする例

この例では、Directory Server を単独でインストールします。

▼ **Directory Server** をインストールする: シーケンスの例

始める前に **Directory Server** は、他の Java ES コンポーネントとの依存関係はありません。

配備で Schema 2 が必要な場合、その他の Java ES コンポーネントを実装する前に Schema 2 用の Directory Server を設定します。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。

- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
「インストール中に自動的に設定」オプションを選択した場合は、インストール中に設定可能なローカル Java ES コンポーネントの設定ページが表示されます。
「インストール後に手動で設定」オプションを選択した場合は、設定ページは表示されません。
- 6 コンポーネントの選択で、**Directory Server**を選択します。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールディレクトリを確認します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。
- 12 **Directory Server**を起動します。

Message Queue のみをインストールする例

この例では、Message Queue を単独でインストールします。Message Queue は、他の Java ES コンポーネントとの依存関係はありません。

▼ Message Queue をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。

- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール後に手動で設定」オプションを選択します
- 6 コンポーネントの選択で、**Message Queue**を選択します。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します。
- 10 **Message Queue**を起動します。

Monitoring Console のみをインストールする例

Java ES コンポーネントで Java ES Monitoring を使用する場合、ほかの Java ES コンポーネントに加えて Monitoring Console コンポーネントをインストールします。ただし、Java ES コンポーネントと同じホストで Monitoring Console を実行することはできません。Monitoring Console は、別個のインストールセッションでインストールします。

▼ Monitoring Console をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
ほかの Java ES コンポーネント製品が Monitoring Console と同じホストにインストールされていないことを確認します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。

- 6 コンポーネントの選択で、**Monitoring Console** を選択します。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールディレクトリを確認します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。
監視を使用するすべてのコンポーネントをほかのホストにインストールしたら、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の第2章「Monitoring Framework の有効化と設定」の手順を使用して、各コンポーネントを監視できるように設定する必要があります。このマニュアルには、Java ES Monitoring を管理および使用する手順も記載されています。Registry Server のインストール後の設定を完了するには、[80 ページの「Service Registry のインストール後の設定」](#)を参照してください。

Portal Server Secure Remote Access をインストールする例

この例では、1つのホストに Access Manager と Portal Server Secure Remote Access をインストールします。Web コンテナとして Web Server を使用します。

▼ Portal Server Secure Remote Access をインストールする: シーケンスの例

- 始める前に
- Portal Server Secure Remote Access は、Access Manager または Access Manager SDK のローカルインストールが必要です。
 - Portal Server Secure Remote Access コアには、ゲートウェイの場合を除き Portal Server のローカルインストールが必要です。ゲートウェイの場合、Portal Server Secure Remote Access は Portal Server のローカルインストールを必要としないので、別のホストにインストールできます。
 - Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と同じ場所にインストールする必要があります。
 - Directory Server は Portal Server で必要になりますが、必ずしもローカルインストールである必要はありません。
 - Access Manager には、ローカルの Web コンテナが必要です。

注 - Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、Access Manager 旧バージョン (6.x) インストールタイプを使用する必要があります。Access Manager レルム (7.x) インストールタイプは、Portal Server をインストールしない場合にのみ使用できます。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 6 コンポーネントの選択で、**Portal Server Secure Remote Access** と **Web Server** を選択します。
Portal Server と Directory Server は自動的に選択されます。Access Manager は手動で選択する必要があります。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します。
- 10 インストール後の設定を完了します。
- 11 **Java ES** コンポーネントを起動します。
- 12 デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port/amserver`
- 13 ポータルにアクセスします。
`http://webserver-host:port/portal/dt`

- 14 **Portal Gateway** にアクセスします。

`https://gateway-server:port/`

Service Registry のみをインストールする例

この例では、Service Registry を単独でインストールします。

▼ Service Registry をインストールする: シーケンスの例

始める前に Service Registry は、HADB および Application Server のローカルインストールと少なくともその2つのサブコンポーネント、ドメイン管理サーバーとコマンド行管理ツールが必要です。Message Queue も必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 6 コンポーネントの選択で、**Service Registry** を選択します。
Application Server とその必須サブコンポーネント、および HADB と Message Queue は自動的に選択されます。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールディレクトリを確認します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。

- 12 **Service Registry** を起動します。

Web Server のみをインストールする例

この例では、Web Server を単独でインストールします。Web Server は、ほかの Java ES コンポーネントとの依存関係はありません。

▼ **Web Server** をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 6 コンポーネントの選択で、**Web Server** を選択します。
- 7 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 インストールディレクトリを確認します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 インストール後の設定を完了します。
- 12 **Web Server** を起動します。

コンテナの設定を使用する **Access Manager SDK** の例

この例では、リモートホストにすでにインストールされている Access Manager を使用して、Access Manager SDK をインストールします。

▼ ホスト A を設定する: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 ライセンス契約に同意し、インストール先のフォルダを選択します。
- 5 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 6 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
インストール後の設定については、[第 5 章](#)を参照してください。
- 7 コンポーネントの選択で、**Access Manager**、**Directory Server**、および**Web** コンテナを選択します。
- 8 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 9 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
- 10 インストールを実行します。
- 11 インストールサマリーとログを表示します。
- 12 **Directory Server** と **Web** コンテナがインストールされ、稼働していることを確認します。

- 13 デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。

<http://webserver-host:port/amserver>

▼ ホスト B を設定する: シーケンスの例

- 始める前に
- リモートホスト (ホスト A) 上で、Access Manager コアサービスがインストールされ、稼働している必要があります。
 - このインストールの例で入力する Web コンテナ情報と Directory Server 設定情報は、Access Manager コアサービスのインストール時に入力した Web コンテナおよび Directory Server の設定情報と一致する必要があります。

Access Manager SDK だけをインストールする場合、Java ES インストーラでは Web コンテナを設定することはできません。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 ライセンス契約に同意し、インストール先のフォルダを選択します。
- 5 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 6 「インストール後に手動で設定」オプションを選択します
- 7 コンポーネントの選択で、**Access Manager SDK** を選択します。
- 8 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 9 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
- 10 インストールを実行します。
- 11 インストールサマリーとログを表示します。

12 Web コンテナ管理サーバーを設定し、起動します。

Web コンテナの設定の詳細については、[第5章](#)を参照してください。

13 *AccessManager-base\setup\AMConfigurator.properties* ファイルを編集します。

AMConfigurator.properties ファイル内の次のパラメータを変更します。

- `DEPLOY_LEVEL` を 4 に設定します。
- `SERVER_HOST` と `SERVER_PORT` を、Access Manager SDK で使用する完全サーバーのホストとポートに設定します。
- `DS_HOST`、`DS_DIRMGRPASSWD`、および `ROOT_SUFFIX` を、ホスト A Directory Server のホスト名、ディレクトリマネージャーパスワード、およびルートサフィックスに設定します。
- `ADMINPASSWD` と `AMLDAPUSERPASSWD` を、ホスト A で使用する `amadmin` および `amldapuser` のパスワードに設定します。
- `AM_ENC_PWD` を、ホスト A で使用するパスワードの暗号化鍵に設定します。Access Manager SDK では、ホスト B への Access Manager のリモートインストール時に指定した暗号化鍵と同じ暗号化鍵を `AM_ENC_PWD` に使用します。この値は、次のコマンドを使用して取得します。`Accessmanager-base/config/AMConfig.properties`
- `WEB_CONTAINER` を、使用している Web コンテナに対応する値に設定します。
- `BASEDIR` を、Access Manager SDK の「インストール後に手動で設定」オプションでのインストール時に使用したインストールディレクトリに設定します。
- ホスト A でレルムモードを使用する場合は `AM_REALM` を「Enabled」に、旧バージョンモードを使用する場合は「Disabled」に設定します。
- SDK で使用する Web コンテナに対応する設定値を見つけ、それらの設定値を当該 Web コンテナの詳細情報を使用して変更します。たとえば、`WEB_CONTAINER` を `WS6` (Sun Java System Web Server) に設定した場合は、`WS61_INSTANCE`、`WS61_HOME`、`WS61_PROTOCOL` など `WS61` プレフィックスの付く設定値を変更してください。

14 管理者として、編集した *AMConfigurator.properties* ファイルを使用して Access Manager を配備します。

AccessManager-base\setup\amconfig.bat

アイデンティティ管理の例

この例では、Access Manager と Directory Server をインストールして、アイデンティティ管理を実装します。ただし、Directory Server はリモートホストにインストールしたものを 사용합니다。

▼ ホスト A をインストールする: シーケンスの例

- 始める前に
- Access Manager は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルへのインストールである必要はありません。
 - Access Manager は、Web コンテナが必要です (この例では Web Server)。
 - ほかの Java ES コンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server が稼働している必要があります。
- **Directory Server** をインストールし、起動します。
[38 ページの「Directory Server のみをインストールする例」](#)を参照してください。

▼ ホスト B をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 ライセンス契約に同意し、インストール先のフォルダを選択します。
- 5 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 6 「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。
- 7 コンポーネントの選択で、**Access Manager** と **Web Server** を選択します。
Directory Server は自動的に選択され、インストールされます。
- 8 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 9 管理者ユーザー名とパスワードを入力します。
- 10 インストールを実行します。
- 11 インストールサマリーとログを表示します。

- 12 *AccessManager-base\setup\AMConfigurator.properties* ファイルを編集します。
DS_HOST、DS_DIRMGRPASSWD、および ROOT_SUFFIX を、ホスト A Directory Server のホスト名、ディレクトリマネージャーパスワード、およびルートサフィックスに設定します。
- 13 Web コンテナを設定し、管理サーバーを起動します。
Web コンテナの設定の詳細については、[第 5 章](#)を参照してください。
- 14 デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port/amserver`

Web とアプリケーションサービスの例

高可用性セッションストレージで使用される HADB は、Application Server で動作し、セッションの持続性を含むフェイルオーバー機能を提供します。

この例では、負荷分散を装備する 2 ノードの HADB クラスタを実装するガイドラインについて説明します。ただし、推奨されるソリューションは、4 台のホストに HADB をインストールし、ほかには何もインストールしないことです。この場合、管理用 HADB とロードバランサを装備するドメイン管理サーバー (DAS)、および Web Server は、別のホストにインストールされます。

パーティション化されたオペレーティングシステムで推奨されるソリューションは、2 つのホストサーバーをインストールし、それぞれで 1 つ以上の HADB プロセスを実行することです。

▼ Web とアプリケーションサービスをインストールする: シーケンスの例

全般的な手順は次のとおりです。

- Java ES コンポーネントをインストールします。
- サーバーを起動します。
- 負荷分散を設定します。

次の例は、1 つのノードにすべての Java ES コンポーネントをインストールする方法を示しています。以降のノードには、配備に必要な Java ES コンポーネントをインストールします。最小で 2 つのインストールセッションが必要になります。

- 始める前に
- Application Server は、HADB と Message Queue のローカルインストールが必要です。
 - Application Server が提供する統合管理ツールを利用するために、Application Server と HADB は同じホスト上になければなりません。

- Application Server のロードバランスプラグインサブコンポーネントは、Web Server が必要です。この例では、Application Server を Web コンテナとして使用します。
- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
 - 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
 - 3 Java ES インストーラを実行します。
 - 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
 - 5 「インストール中に自動的に設定」オプションを選択します。
Message Queue は、設定が不要です。
 - 6 コンポーネントの選択で、**Application Server**を選択します。
Message Queue と HADB、および、Application Server ノードエージェントとロードバ
ランスプラグインを除く Application Server のすべてのサブコンポーネントが自動的に
選択されます。
 - 7 **Application Server** コンポーネントを展開し、ロードバランスプラグインを選択しま
す。

注- 同じアクセス権を使用して、Web Server と Load Balancing Plug-in をインストール
する必要があります。

- 8 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合の
ガイダンスを示します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します。
- 11 Java ES コンポーネントを起動します。
- 12 負荷分散の設定を完了します。
詳しくは、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理
ガイド』を参照してください。

リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例

この例では、Directory Server とともに別のホストにすでにインストールした Access Manager を使用して、Portal Server とそれに必要な Java ES コンポーネントを 1 つのホストにインストールします。Access Manager と Portal Server は、同じ種類の Web コンテナを使用する必要があります。

注- このシーケンスの例を使用するには、『Java ES 5 リリースノート』にある既知の問題 6284663 も参照してください。

▼ ホスト A をインストールする: シーケンスの例

始める前に Portal Server は、Access Manager が必要です。Access Manager は、Directory Server のローカルまたはリモートのコピーと、ローカルの Web コンテナが必要です。Access Manager とは別のホストで Portal Server を実行することができます。この場合、Portal Server は Access Manager SDK のローカルインストールとローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server と Access Manager SDK をインストールする場合、Access Manager の不要なサブコンポーネントの選択を解除します。インストーラは、Portal Server の選択時に、すべての Access Manager のサブコンポーネントを自動的に選択します。

- Access Manager と Directory Server がインストールされ、稼動していることを確認します。

[47 ページの「アイデンティティ管理の例」](#)

▼ ホスト B をインストールする: シーケンスの例

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
この例に当てはまるガイドラインをチェックし、必要に応じて調整を行います。
[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
開始する前に、このインストールで行う必要のあるタスクについてチェックします。
[表 1-1](#)を参照してください。
- 3 Java ES インストーラを実行します。
- 4 インストールのタイプの選択で「カスタム」を選択します。
- 5 「インストール中に自動的に設定」オプションまたは「インストール後に手動で設定」オプションを選択します。

- 6 コンポーネントの選択で、**Portal Server** を選択します。

Access Manager のすべてのコンポーネントおよび Directory Server は、自動的に選択されます。Web コンテナは自動的に選択されません。「Web コンテナの選択」ページが表示され、Web コンテナの選択が求められます。

- 7 **Directory Server** と、**Access Manager SDK** を除く **Access Manager** のすべてのサブコンポーネントの選択を解除します。

依存関係のメッセージに従って、Application Server、Web Server、または以前にインストールしたローカル Web コンテナを選択します。

- 8 非互換性の問題を解決します。

インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

- 9 インストールを実行します。

- 10 インストールサマリーとログを表示します。

- 11 必要なインストール後の設定を完了します。

グラフィカルインタフェースによるインストール

この章では、対話的なグラフィカルインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 53 ページの「前提条件の確認」
- 53 ページの「グラフィカルモードでのインストーラの実行」
- 63 ページの「インストールの取り消し」
- 63 ページの「次の手順」

前提条件の確認

具体的な内容については、24 ページの「一般的なインストール前提条件の確認」を参照してください。

システム要件については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (Windows 版)』の「ハードウェアとソフトウェアのプラットフォーム情報」を参照してください。

グラフィカルモードでのインストーラの実行

インストール中に問題が発生した場合は、第 8 章のトラブルシューティング情報を参照してください。

▼ インストールを開始する

- 1 Sun Java Enterprise System がマウントされた DVD ドライブにアクセスします。
- 2 セットアップ起動プログラムをクリックして、ウィザードを起動します。

注-インストールを開始するには、\Windows\setup.exe ではなく \setup.bat を実行します。

- ダウンロードの場合: ファイルを解凍して、ソフトウェアをダウンロードしたディレクトリに移動し、セットアップ起動プログラム (setup.bat) をクリックします。
- DVD の場合: DVD ドライブのディレクトリに移動し、セットアップ起動プログラムをクリックします。

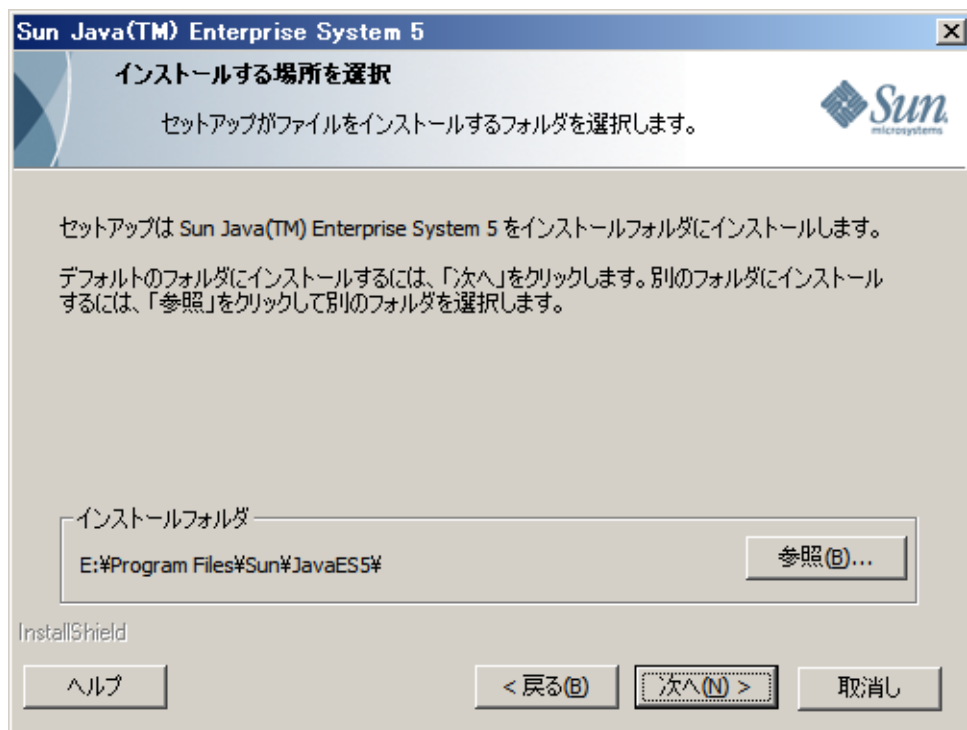
「ようこそ」ページが表示されます。

- 3 「次へ」をクリックして次に進みます。
「ソフトウェアライセンス契約」ページが表示されます。
- 4 「ライセンス使用許諾契約を承諾します」を選択します。「次へ」をクリックします。

J2SE Software Development Kit 5.0 update 9 以上がシステム内で検出されない場合、次のページで J2SE Software Development Kit 5.0 update 9 をインストールする場所を指定できます。



それ以外の場合は、「インストールする場所を選択」ページが表示されます。



- 5 **Java ES** をインストールするフォルダを参照します。
- デフォルトの場所のままにする場合は、何も変更しません。「次へ」をクリックします。
- 「セットアップタイプ」ページが表示されます。



6 次のインストールのタイプから選択します。

- デフォルト

一度にすべての製品と機能を自動的にインストールして設定する場合は、「デフォルト」タイプのインストールを選択します。

- カスタム

インストールする製品と機能、および設定の種類を選択する場合は、「カスタム」タイプのインストールを選択します。

▼ 「デフォルト」セットアップタイプでインストールする

1 「セットアップタイプ」ページから「デフォルト」セットアップを選択し、「次へ」をクリックします。

デフォルトですべてのコンポーネントがインストールされ設定されてから、「管理者設定」ページが表示されます

- 2 「次へ」をクリックして次に進みます。
「管理者設定」ページが表示されます。

Sun Java(TM) Enterprise System

管理者設定

管理者のアカウントおよびパスワードを入力してください。ここで入力する情報は、インストールされるすべての製品で使用されます。

以下の設定は、インストールされる必要なコンポーネント製品のデフォルト値として使用されます。値は、製品を設定するときに上書きできます。

管理者ユーザー ID:

管理者パスワード:

パスワード再入力:

InstallShield

ヘルプ <戻る(B) 次へ(N) > 取消し

- 3 対応する各フィールドに管理者ユーザー ID、管理者パスワードを入力し、パスワードを再入力します。「次へ」をクリックします。

注- このページに入力した値はデフォルト値として設定されますが、これらのデフォルト設定はインストール後に変更できます。

「ファイルのコピーを開始」画面が表示されます。この画面でも、このインストールセッションでのコンポーネントの選択内容が確認されます。

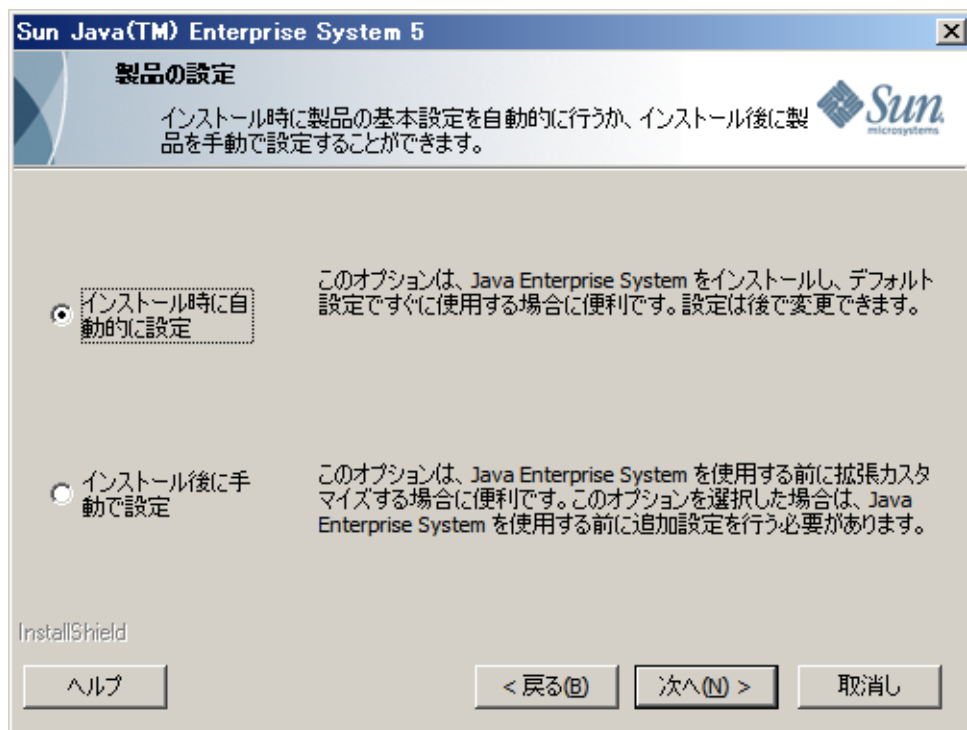
- 4 選択した製品のページに、インストールおよび設定するすべてのコンポーネントが表示されます。「次へ」をクリックします。

コンポーネントの選択を変更するには、「戻る」をクリックして必要な変更を行います。「セットアップの状態」ページ、またそのあとにインストールが進行中であることを示すページが表示されます。インストールが進行中のページに続いて、設定が進行中であることを示すページが表示されます。サーバーの設定によっては、この表示にしばらく時間がかかる場合があります。

- 5 コンポーネントのインストールと設定が完了すると、情報ページが表示されます。
「次へ」をクリックして次に進みます。
「インストールが完了しました」ページが表示されます。
- 6 「完了」をクリックして、セットアップを終了します。

▼ 「カスタム」 セットアップタイプでインストールする

- 1 「セットアップタイプ」ページから「カスタム」セットアップタイプを選択します。次へをクリックします。
次のような「製品の設定」ページが表示されます。



2 次の設定のタイプから選択します。

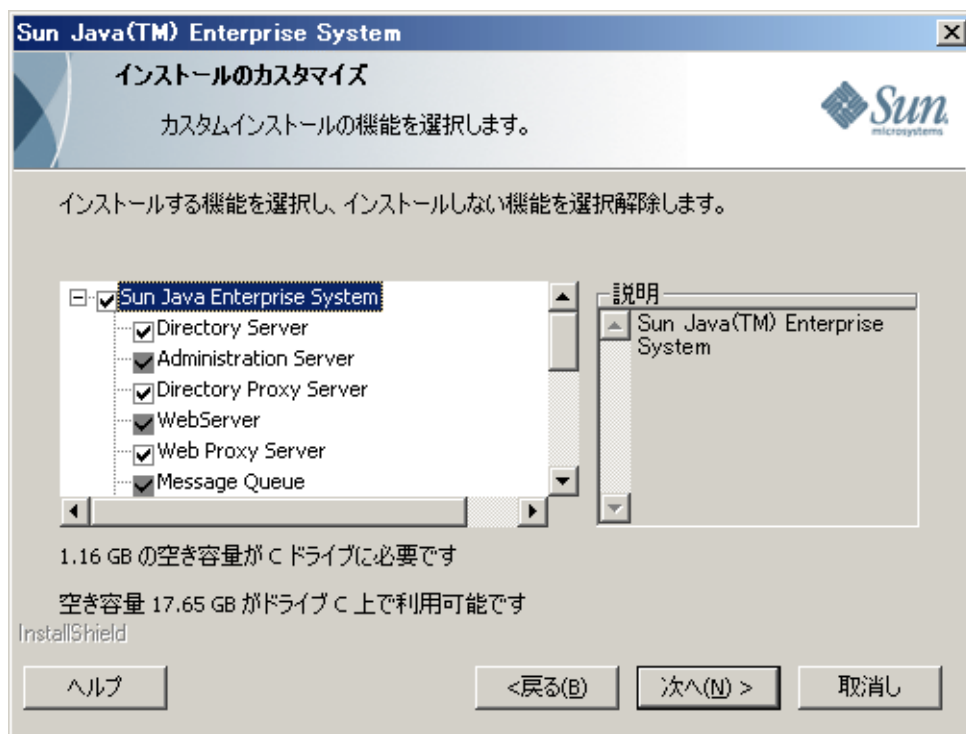
- 60 ページの「「インストール中に自動的に設定」インストールを開始する」
- 62 ページの「「インストール後に手動で設定」インストールを開始する」

▼ 「インストール中に自動的に設定」 インストールを開始する

「インストール中に自動的に設定」では、ユーザーが選択したコンポーネントがインストールされ、デフォルトの設定値に従って設定されます。Java ESを使用するのがはじめてであり、必要を満たす最適な設定が決まっていない場合は、このオプションをお勧めします。

- 1 「インストール中に自動的に設定」オプションをクリックし、「次へ」をクリックします。

「インストールのカスタマイズ」ページが表示されます。



- 2 チェックボックスを選択または選択解除して、自動的にインストールおよび設定するコンポーネントを選択します。コンポーネントは、すべてを選択することも、いくつかを選択することもできます。
 - a. すべてのコンポーネントを選択する: デフォルトでは、「インストールのカスタマイズ」ページですべての製品が選択されています。

- b. いくつかのコンポーネントを選択する:まず「Java ES」の横にあるチェックボックスの選択を解除してから、インストールするコンポーネントの横にあるチェックボックスを選択します。コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存するほかのコンポーネントが自動的に選択されます。

選択するごとにインストールするファイルが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。ページには、ホストで使用可能なディスク容量、および選択したコンポーネントに必要なディスク容量が表示されます。

- c. 「選択したすべてのコンポーネントに多言語パッケージをインストール」オプションを選択して、言語パッケージをインストールします。

Web アプリケーション (Access Manager または Portal Server) が選択され、Web コンテナが選択されていない場合、Web コンテナの選択ページが表示されます。

3. いずれかの **Web** コンテナを選択して「了解」をクリックすると、「インストールのカスタマイズ」ページに戻ります。
4. 「次へ」をクリックして次に進みます。
「管理者設定」ページが表示されます。
5. 対応する各フィールドに管理者ユーザー ID、管理者パスワードを入力し、パスワードを再入力します。「次へ」をクリックします。

注- このページに入力された値はデフォルト値として設定されますが、これらのデフォルト設定はインストール後に変更できます。

「ファイルのコピーを開始」ページが表示されます。このページでも、このインストールセッションでのコンポーネントの選択内容が確認されます。

6. 選択した製品の一覧に、インストールおよび設定するすべてのコンポーネントが表示されていれば、「次へ」をクリックします。コンポーネントの選択を変更するには、「戻る」をクリックして必要な変更を行います。

「セットアップの状態」ページ、またそのあとにインストールが進行中であることを示すページが表示されます。インストールが進行中のページに続いて、設定が進行中であることを示すページが表示されます。サーバーの設定によっては、この表示にしばらく時間がかかる場合があります。

コンポーネントのインストールと設定が完了すると、情報ページが表示されます。

7. 「次へ」をクリックして次に進みます。
「インストールが完了しました」ページが表示されます。
8. 「完了」をクリックして、セットアップを終了します。

▼ 「インストール後に手動で設定」 インストールを開始する

「インストール後に手動で設定」オプションでは、選択したコンポーネントのみがインストールされます。ユーザーがあとで手動でコンポーネントを設定する必要があります。インストールの完了後にコンポーネントの設定へ進むには、[第5章](#)を参照してください。

- 1 「インストール後に手動で設定」ラジオボタンを選択します。「次へ」をクリックします。
「インストールのカスタマイズ」ページが表示されます。
- 2 チェックボックスを選択または選択解除して、インストールするコンポーネントを選択する必要があります。コンポーネントは、すべてを選択することも、いくつかを選択することもできます。
 - a. すべてのコンポーネントを選択する: 「Sun Java Enterprise System」の横にあるチェックボックスを選択します。
 - b. いくつかのコンポーネントを選択する: インストールするコンポーネントの横にあるチェックボックスを選択します。コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存するほかのコンポーネントが自動的に選択されます。

注-リモートシステムにインストールされたコンポーネントを使用する予定の場合、インストーラが選択したコンポーネントを選択解除することもできます。

選択するごとにインストールするファイルが増え、インストールに必要なディスク容量が増えます。ページには、ホストで使用可能なディスク容量、および選択したコンポーネントに必要なディスク容量が表示されます。

 - c. 「選択したすべてのコンポーネントに多言語パッケージをインストール」オプションを選択して、言語パッケージをインストールします。
- 3 「次へ」をクリックして次に進みます。
「ファイルのコピーを開始」ページが表示されます。このページで、インストールの選択内容が確認されます。
- 4 選択した製品のページには、インストールするコンポーネントがすべて一覧表示されます。「次へ」をクリックします。コンポーネントの選択を変更するには、「戻る」をクリックして必要な変更を行います。
「セットアップの状態」ページ、またそのあとにインストールが進行中であることを示すページが表示されます。サーバーの設定によっては、この表示にしばらく時間がかかる場合があります。

インストールが完了すると、情報ページが表示されます。

- 5 「次へ」をクリックして次に進みます。

注 - Message Queue は、選択すると自動的に設定されます。Message Queue を個別に設定する必要はありません。

「インストールが完了しました」ページが表示されます。

- 6 「完了」をクリックして、セットアップを終了します。

インストールセッション後、インストールされた製品のリストが含まれるサマリーファイルを表示するには、インストールウィザードの「サマリーの表示」ボタンをクリックするか、このファイルが格納されたインストールディレクトリにアクセスします。

インストールの取り消し

「取消し」をクリックすると、インストールを取り消すことができます。インストールを取り消すと、アンインストールプロセスが起動し、すでにインストールされている Java ES ソフトウェアが消去されます。

「インストール中に自動的に設定」オプションを選択した場合、インストールのためのファイルのコピーが完了し設定が進行中のときは、インストールを取り消さないでください。設定中にインストールを取り消すと、変更内容のロールバックが行われません。

次の手順

Java ES インストールが正常に完了したあと、インストーラを起動したコンソールまたは端末ウィンドウで Java ES レポータインストールユーティリティーが自動的に起動します。レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを指定することを求められます。その他の入力はありません。

注 - Java ES レポータの詳細については、[22 ページの「Java ES レポータ」](#)を参照してください。

「インストール中に自動的に設定」オプションによるコンポーネントのインストールと設定が完了した場合は、[第 6 章](#)に進み、コンポーネントの起動と停止の方法を学んでください。

「インストール後に手動で設定」オプションによるインストールが完了した場合は、[第 5 章](#)に進み、コンポーネントの設定方法を学んでください。

サイレントモードでのインストール

サイレントインストールは、類似した設定を共有する複数のホストに Sun Java™ Enterprise System (Java ES) をインストールするために使用される、対話処理のないインストールモードです。この章では、サイレントモードを使用して Sun Java Enterprise System ソフトウェアをインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 65 ページの「サイレントインストールのイベント」
- 66 ページの「応答ファイルの作成」
- 68 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」
- 70 ページの「次の手順」

サイレントインストールのイベント

サイレントインストールを実行するには、まずインストールセッションを記録して、サイレントインストールプロセスで使用する応答ファイルを作成します。ユーザーの応答は、応答ファイル内でそれぞれが1つのプロンプトまたはフィールドに対応する、パラメータ群の一覧として保持されます。入力として応答ファイルを使用すると、多数のホストでインストーラを実行できます。このプロセスにより、企業内の複数のホストに設定を伝達することができます。

応答ファイルの内容に基づいてサイレントモードでインストールを実行するには、/s 引数を付けて Setup.bat を実行します。デフォルトでは、Setup.bat は、Setup.bat と同じディレクトリ内で Setup.iss という名前の応答ファイルを探します。/f1 引数を使用すると、別の名前と場所の応答ファイルを指定できます。

サイレントインストールプログラムでは、エラーが発生してもダイアログボックスは表示されません。状態情報は、Setup.log ファイルに記録されます。デフォルトでは、このログファイルは、使用されている応答ファイルと同じディレクトリに作成されます。Setup.bat コマンドに /f2 引数を使用すると、ログファイルに別の名前と場所を指定できます。

▼ サイレントインストールを実行する

- 1 インストール計画を作成します。
非互換性についてシステムを調査します。詳しくは、[24 ページの「一般的なインストール前提条件の確認」](#)を参照してください。
- 2 インストーラを実行して、応答ファイルを生成します。
詳しくは、[66 ページの「応答ファイルの作成」](#)を参照してください。
- 3 編集する前に、応答ファイルのコピーを作成します。
- 4 対象システムに合わせて応答ファイルの値を編集します。
詳しくは、[67 ページの「応答ファイルの編集」](#)を参照してください。
- 5 応答ファイルを指定して、インストーラを実行します。
詳しくは、[68 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」](#)を参照してください。

応答ファイルの作成

応答ファイルを作成するには、レコードを入力するために、最初にインストーラを実行します。インストーラが生成する応答ファイルを使用することで、リアルタイムでの依存性チェックとエラーレポートの機能を活用できます。

応答ファイルの形式は .ini ファイルに似ていますが、応答ファイルの拡張子は .iss です。応答ファイルは、データエントリが埋め込まれた複数のセクションで構成されている、プレーンテキストファイルです。デフォルトでは、Setup.iss という名前の応答ファイルが Windows System フォルダ内に作成されます。



注意-インストーラの使用経験が豊富な場合、応答ファイルを手作業で作成することに慣れているかもしれません。しかし、この方法では、インストール時、設定時、またはサーバーの起動時に問題が発生する恐れがあります。

▼ インストーラを使用して応答ファイルを生成する

- 1 コマンドプロンプトで、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。
`cd JavaES-install-dir`

- 2 Setup.bat /r コマンドを使用して、デフォルトの場所、システムの Windows フォルダ、指定した場所のいずれかに応答ファイルを作成します。

応答ファイルを作成する場所と応答ファイルの名前を指定するには、/f1 オプションを使用します。予期しない結果を回避するため、.iss 拡張子を持つファイルの絶対パスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
Setup.bat /r /f1"C:\Temp\example.iss"
```

注-インストールを開始するには、\Windows\setup.exe ではなく、\Setup.bat を実行してください。

- 3 サイレントインストーラで実行する処理に合わせて情報を入力しながら、インストールを続行します。
入力したデータ型と選択したオプションはすべて、.iss ファイルに記録されます。
インストール処理の最後に応答ファイルが生成されます。

応答ファイルの編集

応答ファイルを生成したあとも、その応答ファイルを編集して、ローカルパラメータを変更することができます。変更できるパラメータには、管理者ユーザー ID、管理者パスワード、パスワード再入力などがあります。

応答ファイルを編集する場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 値を編集する以外は、パラメータを変更しないでください。
- 値が指定されていない場合でも、パラメータを削除しないでください。
- パラメータを追加しないでください。
- パラメータの順序を変更しないでください。
- 元のタイプと形式に注意し、新しい値を入力するときはそれに従ってください。
- 削除する値の代わりに、ほかの値を入力します。パラメータが必須の場合、そのパラメータが削除されているとインストールまたは設定に失敗する可能性があります。
- コンポーネントを追加するには、SunJavaES-count= (total) と SunJavaES-(count number)=SunJavaES\... の両方を変更します。次に例を示します。

元のデータ:

```
SunJavaES-count=2
SunJavaES-0=SunJavaES\MessageQueue
SunJavaES-1=SunJavaES\DirectoryServer
```

変更後のデータ:

```
SunJavaES-count=3
SunJavaES-0=SunJavaES\MessageQueue
SunJavaES-1=SunJavaES\DirectoryServer
SunJavaES-2=SunJavaES\WebServer
```

応答ファイルの詳細については、[付録C](#)を参照してください。

- サブコンポーネントを追加するには、合計カウントとカウント数の両方を変更します。サブコンポーネントは、メインコンポーネントのあとに追加されます。次に例を示します。

```
SunJavaES-3=SunJavaES\AccessManager\AMAdministrationConsole
```

応答ファイルには、SdWelcome ダイアログボックスに対応するセクションもあります。次に例を示します。

```
[{311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C}-SdWelcome-0]
Result=1
```

セクションヘッダー [{311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C}-SdWelcome-0] は、このデータが、ProductCode (および PRODUCT_GUID) 値が {311E6252-893E-4445-B865-94DAFF5C500C} であるコンポーネントの SdWelcome ダイアログボックスに関係することを示します。

ヘッダーの末尾にある -0 は、これが SdWelcome への最初の呼び出しであることを示しています。インストール中に 2 番目の SdWelcome ダイアログボックスが表示された場合、ヘッダーの末尾は -1 となります。

Result=1 は、SdWelcome 関数からの戻り値を示しています。戻り値 1 は、「次へ」ボタンをクリックしたことを示しています。

SdSetupType ダイアログボックスでは、Quick_Configure が「インストール中に自動的に設定」を、Configure_Later が「インストール後に手動で設定」を指定します。

サイレントモードでのインストーラの実行

サイレントモードでインストールを実行するには、あらかじめ記録された応答ファイルが必要です。詳しくは、[66 ページの「応答ファイルの作成」](#)を参照してください。応答ファイルを生成したホストと同じオペレーティングシステムが動作しているホスト上で、インストーラを実行します。

▼ サイレントモードでインストーラを実行する

- 1 コマンドプロンプトで、インストーラが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd JavaES-install-dir
```

- 2 Setup.bat /s コマンドを使用して、サイレントモードでのインストール手順を開始します。

注- デフォルトでは、Setup.iss ファイルは Windows System フォルダ内に作成されます。Setup.bat /s でサイレントインストールを開始する前に、このファイルを Windows System フォルダから Setup.bat が存在するフォルダにコピーする必要があります。そうしないと、コマンドからセットアップの -3 エラーが返されます。

.iss ファイルの場所を指定するには、/f1 オプションを使用します。予期しない結果を回避するために、絶対パスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
Setup.bat /s /f1"C:\Temp\example.iss"
```

- 3 (省略可能) ログファイルにデフォルト以外の場所とファイル名を指定するには、Setup.bat /s に /f2 オプションを付けます。予期しない結果を回避するために、ファイルの絶対パスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
Setup.bat /s /f1"C:\Temp\UninstallExample.iss /f2"C:\Setup.log"
```

インストールしようとしているコンポーネントの数とタイプによっては、時間がかかる場合があります。インストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

Setup.log ファイルの理解

Setup.log は、/s 引数を付けて Setup.bat コマンドを実行した場合に生成されるサイレントインストールログファイルのデフォルトの名前です。Setup.log ファイルには、次の3つのセクションがあります。

- **Install Shield Silent:** このセクションは、このファイルがログファイルであることを明確にするとともに、サイレントセットアップで使用される Install Shield Silent のバージョン情報を示します。
- **Application:** このセクションは、インストールされたアプリケーションの名前とバージョン、および会社名を明示します。
- **Response Result:** このセクションには、サイレントセットアップが成功したかどうかを示す結果コードが含まれています。Response Result セクション内の ResultCode キー名には、整数値が割り当てられます。

Install Shield によって、ResultCode キーには次のいずれかの戻り値が設定されます。

ResultCode	ResultCode の説明
0	成功
-1	一般的なエラー
-2	モードが無効である

- 3 Setup.iss ファイル内に必要なデータが見つからない
- 4 使用可能なメモリーが不足している
- 5 ファイルが存在しない
- 6 応答ファイルに書き込めない
- 7 ログファイルに書き込めない
- 8 Install Shield Silent (.iss) 応答ファイルへのパスが無効である
- 9 一覧の型 (文字列または数値) が無効である
- 10 データ型が無効である
- 11 セットアップ中に不明なエラーが発生した
- 12 ダイアログボックスの順序が違う
- 51 指定されたフォルダを作成できない
- 52 指定されたファイルまたはフォルダにアクセスできない
- 53 選択したオプションが無効である

サイレントインストールに成功すると、ログファイルは次のようになります。

```
[ResponseResult]  
ResultCode=0
```

次の手順

サイレントインストールが完了したら、[第5章](#)に進み、コンポーネントの設定に関する説明に従います。インストール時に拡張設定を実行した場合でも、ほとんどのコンポーネントで追加設定が必要です。

注-ほかのどの作業に進む場合でも、インストール後の設定に関する要件をよく確認しておいてください。

インストール後の設定の実行

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントのインストール後に初期設定を実行する手順について説明します。この章に挙げられていない Java ES コンポーネントについては、インストール後の設定は必要ありません。ただし、この章に挙げられていない Java ES コンポーネントについても、監視データサービスの Java ES コンポーネントをインストールする場合は、これらに関連するインストール後の作業が必要になる場合があります。

この章の内容は次のとおりです。

- 72 ページの「この章の利用方法」
- 72 ページの「Monitoring Console のインストール後の設定」
- 73 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
- 74 ページの「Application Server のインストール後の設定」
- 75 ページの「Directory Proxy Server のインストール後の設定」
- 75 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
- 76 ページの「HADB のインストール後の設定」
- 76 ページの「Java ES レポータのインストール後の設定」
- 77 ページの「Message Queue のインストール後の設定」
- 77 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
- 80 ページの「Service Registry のインストール後の設定」
- 80 ページの「Web Proxy Server のインストール後の設定」
- 81 ページの「Web Server のインストール後の設定」
- 82 ページの「Java 仮想マシンソフトウェアの設定」
- 82 ページの「次の手順」

この章の利用方法

Java ES インストーラでのインストールが完了したら、ほとんどのコンポーネントには、Java ES 環境を運用する前に追加の設定が必要です。この作業の範囲は、選択した設定タイプが「インストール中に自動的に設定」または「インストール後に手動で設定」のいずれであるかによって異なります。

「インストール後に手動で設定」オプションを選択した場合、インストーラは、コンポーネントのパッケージファイルをそれぞれのディレクトリに配置します。パラメータの設定が行われておらず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどのコンポーネントはそのままでは機能しません。多くのコンポーネントには、インストール後の手動設定を実行するための設定ツールが用意されています。設定ツールを実行すると、このガイドおよび各コンポーネントのマニュアルに記載されている指示に従って、追加の変更を行うことができます。

この章の説明に従って作業する前に、Java ES コンポーネントのインストールを完了してください。*JavaES-install-dir\Summary date.txt* ファイルで、インストール時に設定した設定値を含むサマリーレポートを参照できます。

インストールの完了後、インストールした Java ES コンポーネントに関する内容について、この章に含まれる手順に目を通します。Java ES コンポーネントに追加設定が必要ない場合は、[第 6 章](#)の手順に従って Java ES コンポーネントを起動できます。

注 - Java ES コンポーネントのデフォルトのインストール場所は、プラットフォームごとに異なる可能性があります。そのため、この章の説明では、これらの場所を表す変数を使用します。たとえば、*ApplicationServer-base* は、プラットフォームの種類にかかわらず、Application Server のインストール先ディレクトリを表します。

Monitoring Console のインストール後の設定

インストールした Java ES コンポーネントが Java ES Monitoring を使用する場合は、Monitoring Framework を使用するようにそのコンポーネントを設定することが必要な場合があります。設定手順については、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の第 2 章「Monitoring Framework の有効化と設定」を参照してください。

Access Manager のインストール後の設定

Java ES インストーラを使って Web Server 上の Access Manager を設定するたびに、次の手順を実行する必要があります。

注 - すべての Access Manager インストールについて、Web コンテナを再起動する必要があります。Web Server または Application Server で完全インストールを実行している場合は、インストーラによって Web コンテナインスタンスが停止されるので、Web コンテナを手動で起動する必要があります。Access Manager の再起動手順については、84 ページの「[Access Manager の起動と停止](#)」を参照してください。

▼ Web Server 上に Access Manager を設定する

- 1 Directory Server を起動します。
- 2 Web コンテナを起動します。

「インストール中に自動的に設定」後の Access Manager の設定

「インストール中に自動的に設定」の実行後、Access Manager を起動して Access Manager コンソールにログインできます。ただし、いくつかの最終的な設定手順を完了するまで、基本的なユーザー管理操作を実行することはできません。これらの手順は、すでにユーザーデータがプロビジョニングされた Directory Server インスタンスを Access Manager が使用するかどうかにによって異なります。配備状況に応じて、次のような設定作業がさらに必要になることもあります。

- Directory Server プロビジョニングの状況を把握する
- Directory Server 参照整合性検査プラグインを有効にする
- Access Manager インデックスを Directory Server に追加する

これらの作業の実行手順については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

「インストール後に手動で設定」操作後の Access Manager の設定

「インストール後に手動で設定」での操作後、パッケージがインストールされ、すぐに Access Manager 設定パッチファイル `AccessManager-base\setup\amconfig.bat` を使って Access Manager を設定できます。このプログラムの使い方の詳細については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

サードパーティーの Web コンテナ (BEA WebLogic または IBM WebSphere Application Server) 用に Access Manager を設定する手順については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

Application Server のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」での操作後、Application Server にはインストール後の設定は必要ありませんが、「インストール中に自動的に設定」および「インストール後に手動で設定」の操作後に Application Server ロードバランспラグインを設定する必要があります。

「インストール後に手動で設定」の操作後に Application Server を設定するには、*JavaES-Install-Dir\appserver\setup* ディレクトリにある *ASConfigure.bat* を実行します。

▼ Application Server ロードバランспラグインを設定する

- 1 レジストリで、*IS_LB* の値を **true** に、*Cfgr_LB* の値を **false** に設定します。

Windows 2000	HKEY_LOCAL_MACHINE > Software > Sun Microsystems > EntSys5 > Installer > Application Server
Windows 2003 x64 edition	HKEY_LOCAL_MACHINE > Software > Wow6432node > Sun Microsystems > EntSys5 > Installer > Application Server
- 2 *ApplicationServer-base\setup\ASConfigurator.properties* ファイルを編集します。
AS_WSINSTANCEDIR および *AS_WSINSTANCENAME* プロパティーの値を設定します。たとえば、次のように入力します。
AS_WSINSTANCEDIR =C:\\Sun\\JavaES5\\WebServer7\\https-jws-winpc-1.red.iplanet.com
AS_WSINSTANCENAME=https-jws-winpc-1.red.iplanet.com
- 3 *ApplicationServer-base\setup\ASConfigure.bat* コマンドを実行します。

Directory Proxy Server のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」の操作後に、追加の設定は必要ありません。

「インストール後に手動で設定」での操作後、パッケージがインストールされ、Directory Proxy Server を設定できるようになります。Directory Proxy Server インスタンスの作成手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』を参照してください。

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Directory Proxy Server を設定する

- 1 *DirectoryProxyServer-base\dps6\bin* ディレクトリに移動します。
`cd DirectoryProxyServer-base \dps6\bin`
- 2 **Directory Proxy Server** インスタンスを作成します。
`dpadm.exe create -p port-no -P ssl-port-no instance-path`
- 3 インスタンスを起動します。
`dpadm.exe start instance-path`

Directory Server のインストール後の設定

「インストール後に手動で設定」での操作後、パッケージがインストールされ、Directory Server の設定作業を実行できるようになります。

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Directory Server を設定する

- 1 *DirectoryServer-base\ds6\bin* ディレクトリに移動します。
`cd DirectoryServer-base\ds6\bin`
- 2 **Directory Server** インスタンスを作成します。
`dsadm.exe create -p port-no -P ssl-port-no instance-path`

- 3 インスタンスを起動します。
`dsadm.exe start instance-path`
- 4 対応するドメインコンポーネントでルートサフィックスを作成します。
`dsconf.exe create-suffix --unsecured -p port-no root-suffix`

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に **Directory Service Control Center (DSCC)** を設定する

- 1 `DirectoryServer-base\ds6\bin` ディレクトリに移動します。
`cd DirectoryServer-base\ds6\bin`
- 2 `dscsetup.exe` を実行します。

HADB のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」での操作後に、HADB にインストール後の追加設定は必要ありません。

「インストール後に手動で設定」での操作後、次の手順を実行します。

- コマンドパスを `HADB-base\4.4.3-4\lib` に変更します。
- `HADBConfig.bat` ファイルを実行します。
このコマンドで `HADBMgrAgent` サービスの登録と起動が行われます。

Java ES レポータのインストール後の設定

Java ES レポータのインストール後に、レポータを無効にして Sun にレポートを送信しないようにしたり、無効にしたあとでレポータを再度有効にしたりすることができます。

▼ **Java ES** レポータを有効または無効にする

- 1 `config.properties` レポータ設定ファイルを見つけます。
`JavaES-install-dir\share\mfwk\config\reporter\config.properties`

- 2 ファイルを編集して、**enabled** プロパティを **true** または **false** に設定します。
enabled=true # レポータは有効
enabled=false # レポータは無効
- 3 共通エージェントコンテナを再起動します。
cacaoadm start

Message Queue のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」の操作後に、追加の設定はありません。Windows のサービスを使用して Message Queue を起動できます。[88 ページ](#)の「[Windows サービスを使用して Message Queue を起動する](#)」を参照してください。

「インストール後に手動で設定」での操作後、パッケージがインストールされ、Message Queue の設定作業を実行できるようになります。インストール後の設定手順の詳細については、『Sun Java System Message Queue 3.7 UR1 Administration Guide』を参照してください。

Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」での操作中にインストーラが設定するのは、Portal Server のみです。

「インストール後に手動で設定」で操作したあとに、ファイルのみがコピーされているので、Portal Server の設定を手動で完了する必要があります。

Application Server と Web Server の両方をインストールするように選択すると、Web Server が、Access Manager の配備に使用されるデフォルトの Web コンテナになります。Portal は、Access Manager が配備されるコンテナに配備されます。

注 - Portal Server Secure Remote Access のコンポーネントを、Portal Server がインストールされていないホスト上に設定する場合は、psconfig.bat コマンドを使用してください。

「インストール中に自動的に設定」での操作後の Portal Server および Portal Server Secure Remote Access の設定

「インストール中に自動的に設定」での操作中にインストーラが設定するのは、Portal Server のみです。Portal Server Secure Remote Access (SRA) のコンポーネントを選択すると、対応する MSI パッケージはインストールされますが、これらのコンポーネントは設定されません。Portal Server Secure Remote Access のコンポーネントは次のとおりです。

- ゲートウェイ
- Netlet プロキシ
- Rewriter プロキシ

Portal Server Secure Remote Access のコンポーネントは、次のいずれかのユーティリティを使用して設定できます。

- psadmin.bat
- psconfig.bat

▼ psadmin.bat を使用して Portal Server Secure Remote Access を設定する

- 1 必要な Portal Server Secure Remote Access コンポーネントのテンプレートプロパティファイルを *PortalServer-base\template\sra* ディレクトリから *portalserver-base\data* にコピーします。

テンプレートプロパティファイルは次のとおりです。

- ゲートウェイ: GWConfig.properties.template
- Netlet プロキシ: NLPConfig.properties.template
- Rewriter プロキシ: RWPConfig.properties.template

- 2 Directory Server を起動します。
- 3 共通エージェントコンテナインスタンスを起動します。
- 4 Web コンテナを起動します。
- 5 テンプレートプロパティファイルを編集します。
- 6 Portal Server Secure Remote Access をオンにします。

PortalServer-base \bin\psadmin.bat switch-sra-status -u admin-user-name -f password-file on

7 Portal Server Secure Remote Access を有効にします。

```
PortalServer-base \bin\psadmin.bat provision-sra -u admin-user-name -f password-file
-p PortalName --gateway-profile gateway_profile -enable
```

8 Portal Server Secure Remote Access コンポーネントインスタンスを作成します。

```
PortalServer-base \bin\psadmin.bat create-sra-instance -u admin-user-name -f
password-file -S PortalServer-base\data/template-property-file -t
gateway/nlproxy/rwproxy
```

9 Portal Server Secure Remote Access インスタンスを起動します。

```
PortalServer-base \bin\psadmin.bat start-sra-instance -u admin-user-name -f
password-file -N gateway_profile -t gateway/nlproxy/rwproxy
```

▼ psconfig.bat を使用して SRA を設定する**1 PortalServer-base\samples\psconfig ディレクトリに移動します。****2 適当なサンプル xml ファイルを選択し、適切な値に編集します。**

PortalServer-base\samples\psconfig にある README.txt を使用して適当なサンプルファイルを選び、適切な値に変更します。関連するサンプル xml ファイルは次のとおりです。

example10.xml	ゲートウェイコンポーネントのみをインストールするテンプレートサンプル設定ファイル
example11.xml	Netlet プロキシコンポーネントのみをインストールするテンプレートサンプル設定ファイル
example12.xml	Rewriter プロキシコンポーネントのみをインストールするテンプレートサンプル設定ファイル
example17.xml	Web Server コンテナに配備する Portal Server または検索サーバー、およびすべての Portal Server Secure Remote Access コンポーネントを設定するテンプレートサンプル設定ファイル

3 psconfig.bat コマンドを実行します。

```
psconfig.bat --config PortalServer-base\samples\psconfig example-file
```

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に **Portal Server** および **Portal Server Secure Remote Access** を設定する

- 1 *PortalServer-base\samples\psconfig* ディレクトリに移動します。
- 2 適当なサンプル **xml** ファイルを選択し、適切な値に編集します。
PortalServer-base\samples\psconfig にある **README.txt** を使用して適当なサンプルファイルを選び、適切な値に変更します。
- 3 **psconfig.bat** コマンドを実行します。

```
psconfig.bat --config PortalServer-base\samples\psconfig example17.xml
```


example17.xml ファイルは、Web コンテナに配備する Portal Server または検索サーバー、およびすべての Portal Server Secure Remote Access コンポーネントの設定に使用します。

Service Registry のインストール後の設定

Service Registry は、インストール中に自動的に設定できません。インストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Service Registry の設定作業を実行できるようになります。Service Registry は管理者以外のユーザーとして設定することをお勧めします。詳細については、『Service Registry 3.1 管理ガイド』の「Service Registry の設定」、特に作業『Service Registry 3.1 管理ガイド』の「インストール後の設定のあとでカスタムプロパティを使って Service Registry を root として設定する」を参照してください。

Web Proxy Server のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」の操作後に、追加の設定は必要ありません。
「インストール後に手動で設定」の操作後、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Proxy Server を設定できるようになります。

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Web Proxy Server を設定する

- 1 **WebProxyServer-base**\bin\proxy\install\misc ディレクトリに移動します。
- 2 設定したい内容に合わせてプロパティファイルを更新します。
wps.properties ファイルに含まれる設定の例を示します。

```

WPS_JDK_HOME=<Java_Home>
WPS_SERVER_ROOT=JavaES-install-dir\webproxyserver
WPS_ADMIN_NAME=admin
WPS_ADMIN_PWD=admin123
WPS_ADMIN_PORT=8889
WPS_START_ON_BOOT=N
WPS_ADMIN_SERVER_USER=root
WPS_SERVER_NAME=jws-v60x-4.red.ipplanet.com
WPS_SERVER_PORT=8081
WPS_SERVER_ID=proxy-server1
WPS_ADMIN_SERVER_ID=proxy-admserv
WPS_SERVER_USER=root

```
- 3 **WebProxyServer-base** に移動します。
- 4 WPSConfigure.bat コマンドを実行します。

Web Server のインストール後の設定

「インストール中に自動的に設定」での操作後に、Web Server の設定に追加の設定は必要ありません。

▼ 「インストール後に手動で設定」での操作後に Web Server を設定する

「インストール後に手動で設定」の操作後、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Server を設定できるようになります。

- 1 **Web Server** コンフィギュレータを実行して、**Web Server** の実行時設定を作成します。
詳しくは、『Sun Java System Web Server 7.0 Installation and Migration Guide』の「Configure Later Mode (Java ES Only)」を参照してください。
- 2 共通サーバー設定を確認し、その設定を必要に応じて更新します。

Java 仮想マシンソフトウェアの設定

使用する Java ES コンポーネントに必要なインストール後の設定が完了したあとで、Java ES コンポーネントによっては、Java 仮想マシン (JVM™) ソフトウェアの調整が必要になる場合があります。JVM ソフトウェアはいくつかのエンティティから構成されていますが、その中でもっとも重要なのは、コンパイラです。コンパイラは Java バイトコードをマシン命令に変換します。この Java ES リリースに含まれている Java Development Kit (JDK™) ソフトウェアのバージョンでは、JVM ソフトウェアの設定をいくつか選択することができます。重要なオプションとして `-server` オプションがあります。`-server` オプションは、JVM をサーバーモードで実行するための便利な調整オプションです。オプションの一覧を取得するには `java -?` コマンドを使用します。

Java ヒープメモリーも、設定しなければならない可能性のある重要な調整オプションの 1 つです。次に例を示します。

- 初期 Java ヒープサイズを設定するには、`-Xms size` を使用します。
- 最大 Java ヒープサイズを設定するには、`-Xmx size` を使用します。

高負荷システムの場合、まずはヒープサイズの最大値を 1.2G バイトに設定してみることをお勧めします。

次の手順

この章で説明した設定作業が完了したら、[第 6 章](#)の説明に従って Java ES コンポーネントを起動し、インストール後の設定を確認します。

インストールした Java ES コンポーネントの確認

この章では、インストールと設定が済んだ Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントを起動および停止する方法について説明します。ここで説明する手順を実行することで、コンポーネントが正常に動作するかどうかを確認できます。

この章の手順を実行する前に、[第5章](#)で説明されているインストール後の設定作業がすべて完了しているようにしてください。

注- 「インストール中に自動的に設定」オプションを使用した場合は、インストールルートの場所にある `summary.txt` ファイルを参照して、各コンポーネントに関連した情報を確認してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 84 ページの「Java ES の起動シーケンス」
- 84 ページの「Access Manager の起動と停止」
- 84 ページの「Application Server の起動と停止」
- 86 ページの「Directory Server の起動と停止」
- 86 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
- 87 ページの「HADB 管理エージェントの起動と停止」
- 88 ページの「Message Queue の起動と停止」
- 89 ページの「Monitoring Console の起動と停止」
- 89 ページの「Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス」
- 90 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
- 91 ページの「Portal Server の起動と停止」
- 93 ページの「Web Proxy Server の起動と停止」
- 95 ページの「Web Server の起動と停止」
- 98 ページの「次の手順」

Java ES の起動シーケンス

Java ES 5 の起動シーケンスは、Web コンテナによって異なります。Web Server が Web コンテナの場合の起動シーケンスは、次のとおりです。

1. 共通エージェントコンテナ
2. Directory Server
3. Web Server

Application Server が Web コンテナの場合の起動シーケンスは、次のとおりです。

1. 共通エージェントコンテナ
2. Directory Server
3. HADB
4. Application Server

インストール後、共通エージェントコンテナと HADB は自動的に起動します。Portal Server と Access Manager は Web コンテナ内で動作するため、Web コンテナを起動した場合にのみアクセスできます。

Access Manager の起動と停止

Access Manager が正常に機能するかどうかは、Directory Server と Web コンテナに依存しています。Access Manager は、次の Web コンテナに配備できます。

- Web Server
- Application Server

デフォルトでは、Web コンテナはインストール後には稼働していません。Web コンテナを起動する必要があります。Web Server および Application Server の起動と停止の詳細については、[95 ページの「Web Server の起動と停止」](#)および [84 ページの「Application Server の起動と停止」](#)を参照してください。Access Manager が機能するには、Directory Server も動作している必要があります。Directory Server の起動の詳細については、[86 ページの「Directory Server の起動と停止」](#)を参照してください。

Access Manager は、サービスページに起動と停止のエントリがありません。

Application Server の起動と停止

Application Server が機能するかどうかは、Message Queue に依存しています。Java ES インストーラの「完了」ページでサーバーの起動オプションを選択済みの場合は、Application Server はインストール後に自動的に起動されます。

Application Server の起動と停止は、Application Server インストールディレクトリの bin フォルダにある .bat ファイルにアクセスすることによっても可能です。

▼ Application Server ドメインを起動する

- 1 *ApplicationServer-base\bin* ディレクトリに移動します。

- 2 **Application Server** ドメインを起動します。

```
asadmin.bat start-domain --user admin-user-ID --passwordfile passwordFileName domain-name
```

たとえば、*domain1* を、*admin-user-ID* *admin*、*passwordFileName* *passfile* で起動するには、次のコマンドを入力します。

```
asadmin.bat start-domain --user admin --passwordfile passfile domain1
```

▼ Application Server ドメインを停止する

- 1 *ApplicationServer-base\bin* ディレクトリに移動します。

- 2 **Application Server** ドメインを停止します。

```
asadmin.bat stop-domain domainName
```

▼ Application Server エージェントを起動する

- 1 *ApplicationServer-base\bin* ディレクトリに移動します。

- 2 **Application Server** エージェントを起動します。

```
asadmin.bat start-node-agent --port admin-Port --user admin-user-ID --password admin-password node-agent--name
```

▼ Application Server エージェントを停止する

- 1 *ApplicationServer-base\bin* ディレクトリに移動します。

- 2 **Application Server** エージェントを停止します。

```
asadmin.bat stop-node-agent node-agent-name
```

Directory Server の起動と停止

デフォルトでは、Directory Server はインストールの完了時に起動されます。

Directory Server の起動と停止は、Directory Server インストールディレクトリの `bin` フォルダにある `dsadm.exe` ファイルにアクセスすることによっても可能です。

▼ Directory Server を起動する

- 1 *DirectoryServer-base*\ds6\bin ディレクトリに移動します。

```
cd DirectoryServer-base\ds6\bin
```

- 2 **Directory Server** インスタンスを起動します。

```
dsadm.exe start instance-path
```

たとえば、次のコマンドを入力して Directory Server インスタンスを起動します。

```
dsadm.exe start C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE\var\DSInstance
```

▼ Directory Server を停止する

- 1 *DirectoryServer-base*\ds6\bin ディレクトリに移動します。

```
cd DirectoryServer-base\ds6\bin
```

- 2 **Directory Server** インスタンスを停止します。

```
dsadm.exe stop instance-path
```

Directory Proxy Server の起動と停止

デフォルトでは、Directory Proxy Server はインストールの完了時に起動されます。

Directory Proxy Server の起動と停止は、Directory Proxy Server インストールディレクトリの Directory Proxy Server フォルダにある `dsadm.exe` ファイルにアクセスすることによっても可能です。

▼ Directory Proxy Server を起動する

- 1 *DirectoryServer-base*\dps6\bin ディレクトリに移動します。

```
cd DirectoryServer-base\dps6\bin
```

- 2 **Directory Proxy Server** インスタンスを起動します。

```
dpadm.exe start instance-path
```

たとえば、次のコマンドを入力して Directory Proxy Server インスタンスを起動します。

```
dpadm.exe start C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE\var\DPSInstance
```

▼ **Directory Proxy Server** を停止する

- 1 *DirectoryServer-base\dps6\bin* ディレクトリに移動します。

```
cd DirectoryServer-base\dps6\bin
```

- 2 **Directory Proxy Server** インスタンスを停止します。

```
dpadm.exe stop instance-path
```

HADB 管理エージェントの起動と停止

HADB 管理エージェントは、Windows のサーバーとして登録されます。HADB サービスは、起動タイプとして自動的に起動します。

Java ES のインストールが正常に完了すると、HADBMgrAgent サービスは Windows サービスとして登録されます。HADB の起動タイプは「自動」に設定されるため、このサービスは自動的に開始されます。HADB 管理エージェントを停止するには、次の手順に従います。

▼ **HADB** を「サービス」から停止する

- 1 「スタート」、「設定」、「コントロールパネル」の順に選択します。
- 2 「管理ツール」を選択します。
- 3 「サービス」を選択します。
- 4 「サービス」一覧から、停止する HADBMgrAgent サービスを選択します。
次のいずれかの方法でサービスを停止できます。
 - マウスボタン 2 をクリックして「停止」を選択します。
 - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
 - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

Message Queue の起動と停止

Message Queue には依存関係はありません。デフォルトでは、Java ES インストーラは、Windows 上で自動的に起動する設定で Message Queue をインストールします。Windows 上で Message Queue サービスを起動または停止することが必要になる場合もあります。

▼ Message Queue を Windows の「スタート」メニューから起動する

- 「スタート」、「プログラム」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Message Queue 3.7 UR1」、「Message Broker」の順に選択します。

▼ Windows サービスを使用して Message Queue を起動する

- 1 「スタート」、「設定」、「コントロールパネル」の順に選択します。
- 2 「管理ツール」を選択します。
- 3 「サービス」を選択します。
- 4 「サービス」一覧から「**Message Queue Broker**」を選択します。
次のいずれかの方法でサービスを開始できます。
 - マウスボタン 2 をクリックして「開始」を選択します。
 - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
 - 「操作」メニューの「開始」を選択します。

▼ Windows サービスを使用して Message Queue を停止する

- 1 「スタート」、「設定」、「コントロールパネル」の順に選択します。
- 2 「管理ツール」を選択します。
- 3 「サービス」を選択します。

- 4 「サービス」一覧から「**Message Queue Broker**」を選択します。
次のいずれかの方法でサービスを停止できます。
 - マウスボタン2をクリックして「停止」を選択します。
 - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
 - 「操作」メニューの「停止」を選択します。

Monitoring Console の起動と停止

Monitoring Console は、いずれかの Java ES コンポーネントがインストールされている同じホストから実行することはできません。Monitoring Console の使用方法については、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Console の起動」を参照してください。

Web コンテナの起動と Portal Server デスクトップへのアクセス

Portal Server の起動と停止のメカニズムは、Sun Java Systems の Web コンテナが稼働している Web コンテナの起動と停止のメカニズムの一部です。Portal Server は、Directory Server、Access Manager、および Access Manager SDK にも依存します。次の各節では、インストールと設定のあとで、Sun の Web コンテナ、Access Manager、および Portal Server を起動する方法について説明します。

- [84 ページの「Application Server の起動と停止」](#)
- [95 ページの「Web Server の起動と停止」](#)

Portal Server は、Access Manager 管理コンソールを使って管理されます。Access Manager 管理コンソールを開く手順については、[84 ページの「Access Manager の起動と停止」](#)を参照してください。

▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップにアクセスする

Portal Server の Web プロトコルとして、HTTP または HTTPS を使用できます。デフォルトでは、ホストは *hostname.domain* です。

- 1 ブラウザに次の URL 形式を指定して、サンプルデスクトップを表示します。
デフォルトのポータルアクセス URL およびデフォルトの配備 URI は、/portal です。

`http://hostname.domain:port/portal`

URLを入力すると開始画面が開き、Portal Server の簡単な説明と、インストール時に選択したサンプルポータルへのリンクが表示されます。リンクの1つをクリックすると、そのサンプルポータルの匿名ポータルデスクトップにアクセスします。サンプルデスクトップが問題なく表示される場合は、Portal Server のインストールは正常に行われています。

- 2 ブラウザの **URL** フィールドに次のように入力します。

`http://hostname.domain:port/psconsole`

- 3 指定したポートでゲートウェイが実行中であることを確認します。

`netstat -a`

デフォルトのポートは443です。

- ゲートウェイが稼働していない場合は、ゲートウェイを起動します。

```
PortalServer-base\bin\psadmin.bat start-sra-instance -u amadmin -f  
amadmin-password-file --instance-type gateway --instance-name  
gateway-instance-name
```

- 4 ログファイルを表示して、問題が記録されていないことを確認します。
- 5 ブラウザの **URL** フィールドに次のように入力して、セキュリティ保護されたモードで **Portal Server** を実行します。

`https://gateway-hostname:port`

インストール時にデフォルトポート (443) を選択した場合には、ポート番号を指定する必要はありません。

Portal Server Secure Remote Access の起動と停止

Portal Server の Secure Remote Access コンポーネントにはブラウザベースのセキュリティ保護されたリモートアクセス機能が備わっているため、リモートデバイスの Java テクノロジ対応ブラウザから、ポータルのコンテンツとサービスにアクセスできます。ゲートウェイサブコンポーネントは、リモートユーザーごとにインタフェースを確立して、内部の Web サーバーとアプリケーションサーバーからのコンテンツを安全に配信します。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と、Access Manager または Access Manager SDK に依存しています。

▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイを起動する

- 1 ゲートウェイサブコンポーネントをインストールし、必要なプロファイルを作成したら、ゲートウェイを起動します。

```
gateway-install-root \bin\psadmin.bat start-sra-instance --adminuser amadmin
--passwordfile passwordFileName --name default --type gateway
```

default は、インストール時に作成されたデフォルトのゲートウェイプロファイルです。あとで独自に新しいプロファイルを作成し、そのプロファイルを指定してゲートウェイを再起動することもできます。

- 2 指定したポートでゲートウェイが実行中かどうかチェックします。

```
netstat -a
```

デフォルトのゲートウェイポートは 443 です。

▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイを停止する

- ゲートウェイを停止します。

```
gateway-install-root \bin\psadmin.bat stop-sra-instance --adminuser amadmin
--passwordfile passwordFileName --name default --type gateway
```

このコマンドを実行すると、ホスト上で動作中のすべてのゲートウェイインスタンスが停止します。

Portal Server の起動と停止

Portal Server の起動と停止のメカニズムは、Web コンテナ (Web Server または Application Server のどちらか) の起動と停止のメカニズムの一部です。Portal Server は、Directory Server、Access Manager または Access Manager SDK、および Web コンテナに依存しています。

▼ Portal Server を起動する

- 1 **Directory Server** インスタンスを起動します。

```
JavaES5-Install-Dir\DSEE\ds6\bin\dsadm.exe start DSInstancePath
```

- 2 共通エージェントコンテナサーバーインスタンスを起動します。

```
JavaES5-Install-Dir \share\cacao_2\bin\cacaoadm.bat start
```

しばらく待って、共通エージェントコンテナサーバーが起動していることを確認します。

- 3 (省略可能) 共通エージェントコンテナサーバーの状態を確認します。

```
JavaES5-Install-Dir\share\cacao_2\bin\cacaoadm.bat status
```

共通エージェントコンテナサーバーの状態は、次のような形式で表示されます。

```
default instance is DISABLED at system startup.
```

```
Current retries count : 0/4
```

```
Processes:
```

```
3780
```

```
Uptime: 0 day(s), 0:8
```

- 4 **Derby Server** インスタンスを起動します。

```
JavaES5-Install-Dir \share\ant\bin\ant.bat -buildfile PortalServer-base\lib\derby.xml  
-propertyfile PortalServer-base\config\PSConfig.properties start-instance
```

注 - Derby Server が起動されないと、Wiki およびコミュニティーサンプルは失敗します。

- 5 **Web** コンテナを起動します。これは、**Web Server** または **Application Server** である可能性があります。

注 - Access Manager と Portal Server の両方が同じ Web コンテナ上に配備される場合、Web コンテナを起動すると、デフォルトで Access Manager と Portal Server の両方が起動されます。

- a. **Web Server** を起動するには、次のように入力します。

```
JavaES5-Install-Dir \WebServer7\WebServer-Instance\bin\start.bat
```

- b. **Application Server** を起動するには、次のように入力します。

```
JavaES5-Install-Dir\appserver\bin\asadmin.bat start-domain --user  
adminUserName --password adminPassword deployedDomain
```

Web Proxy Server の起動と停止

▼ **Proxy Administration Server** サービスをコマンドプロンプトから起動する

- 1 `WebProxyServer-base\admin-service-id\` ディレクトリに移動します。
- 2 `startsvr.bat` と入力します。
デフォルトの管理サービス ID は、`proxy-admserv` です。

▼ **Proxy Admin Server** サービスをコマンドプロンプトから停止する

- 1 `WebProxyServer-base\admin-service-id\` ディレクトリに移動します。
- 2 `stopsvr.bat` と入力します。
デフォルトの管理サービス ID は、`proxy-admserv` です。

▼ **Proxy Server** サービスをコマンドプロンプトから起動する

- 1 `WebProxyServer-base\proxy-service-id\` ディレクトリに移動します。
- 2 `startsvr.bat` と入力します。
デフォルトのプロキシサービス ID は、`proxy-server1` です。

▼ **Proxy Server** サービスをコマンドプロンプトから停止する

- 1 `WebProxyServer-base\proxy-service-id\` ディレクトリに移動します。
- 2 `stopsvr.bat` と入力します。
デフォルトのプロキシサービス ID は、`proxy-server1` です。

▼ **Socks Server** サービスをコマンドプロンプトから起動する

- 1 *JavaES-install-dir\proxy-service-id* ディレクトリに移動します。
- 2 *startsockd.bat* と入力します。
デフォルトのプロキシサービス ID は、*proxy-server1* です。

▼ **Socks Server** サービスをコマンドプロンプトから停止する

- 1 *JavaES-install-dir\proxy-service-id* ディレクトリに移動します。
- 2 *stopsockd.bat* と入力します。
デフォルトのプロキシサービス ID は、*proxy-server1* です。

▼ **Proxy Admin Server** サービスを「スタート」メニューから起動する

- 「スタート」、「プログラム」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Proxy Server 4.0.4」、「Start Admin Server」の順に選択します。

▼ **Proxy Server** サービスを「スタート」メニューから起動する

- 「スタート」、「プログラム」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Proxy Server 4.0.4」、「Start Proxy Server」の順に選択します。

▼ **Proxy Server** サービスを「スタート」メニューから停止する

- 「スタート」、「プログラム」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Proxy Server 4.0.4」、「Stop Proxy Server」の順に選択します。

Web Server の起動と停止

Java ES インストーラの「完了」ページでサーバーの起動オプションを選択済みの場合は、Web Server はインストール後に自動的に起動されます。

▼ Web Server を Windows の「スタート」メニューから起動する

- 「スタート」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Server 7.0」、「Start Web Server Administrator Server」の順に選択します。
コマンド画面が表示されます。

▼ Web Server を Windows の「スタート」メニューから停止する

- 「スタート」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Server 7.0」、「Stop Web Server Administrator Server」の順に選択します。
コマンド画面が表示されます。

▼ Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を起動する

- 1 「スタート」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Server 7.0」、「管理コンソール」の順に選択します。
「Web Server 7.0 Administration Server Login」ページが表示されます。
- 2 ユーザー名とパスワードを入力し、「OK」をクリックします。
「Web Server 7.0 Administration Server」ページが表示されます。
- 3 ドロップダウンリストからサーバーを選択し、「Manage」をクリックします。
「Server Manager」ページが表示されます。
- 4 「Server On」をクリックします。
Web Server が起動し、確認ダイアログボックスが表示されます。

▼ Web Server 管理サーバーを使用して Web Server を停止する

- 1 「スタート」、「Sun Java Enterprise System 5」、「Web Server 7.0」、「管理コンソール」の順に選択します。
「Web Server 7.0 Administration Server Login」ページが表示されます。
- 2 ユーザー名とパスワードを入力し、「OK」をクリックします。
「Web Server 7.0 Administration Server」ページが表示されます。
- 3 ドロップダウンリストからサーバーを選択し、「Manage」をクリックします。
「Server Manager」ページが表示されます。
- 4 「Server Off」をクリックします。
Web Server が停止し、確認ダイアログボックスが表示されます。

▼ Windows サービスを使用して Web Server を起動する

- 1 「スタート」、「設定」、「コントロールパネル」の順に選択します。
- 2 「管理ツール」を選択します。
- 3 「サービス」を選択します。
- 4 「サービス」一覧から「Web Server 7.0」を選択します。
次のいずれかの方法でサービスを開始できます。
 - マウスボタン2をクリックして「開始」を選択します。
 - 「サービスの開始」アイコンをクリックします。
 - 「操作」メニューをクリックして、「開始」オプションをクリックします。
- 5 「Sun Java System Web Server 7.0 Administration Server」を選択して手順4を繰り返し、Web Server 管理サーバーを起動します。

▼ startserv.bat を使用して **Web Server** を起動する

- 1 *WebServer-base\admin-server\bin* ディレクトリに移動します。
- 2 startserv.bat コマンドを実行して、**Web Server** プロセスを起動します。

▼ startserv.bat を使用して **Web Server** インスタンスを起動する

- 1 *WebServer-base\https-[INSTANCE_NAME]\bin* ディレクトリに移動します。
- 2 startserv.bat コマンドを実行して、**Web Server** プロセスを起動します。

▼ **Windows** サービスを使用して **Web Server** を停止する

- 1 「スタート」、「設定」、「コントロールパネル」の順に選択します。
- 2 「管理ツール」を選択します。
- 3 「サービス」を選択します。
- 4 「サービス」一覧から「**Web Server 7.0**」を選択します。
次のいずれかの方法でサービスを停止できます。
 - マウスボタン2をクリックして「停止」を選択します。
 - 「サービスの停止」アイコンをクリックします。
 - 「操作」メニューの「停止」を選択します。
- 5 「**Sun Java System Web Server 7.0 Administration Server**」を選択して手順4を繰り返し、**Web Server** 管理サーバーを停止します。

▼ stopserv.bat を使用して **Web Server** を停止する

- 1 *WebServer-base\https-admserv\bin* ディレクトリに移動します。
- 2 stopserv.bat コマンドを実行して、**Web Server** プロセスを停止します。

▼ stopserv.bat を使用して **Web Server** インスタンスを停止する

- 1 `WebServer-base\https-[INSTANCE_NAME]\bin` ディレクトリに移動します。
- 2 stopserv.bat コマンドを実行して、**Web Server** プロセスを停止します。

次の手順

この章を終えると、インストールと設定を終えた Java ES コンポーネントが正常に機能することの確認が完了します。これで Java ES コンポーネントの管理に進むことができます。詳しくは、Java ES コンポーネントのマニュアルを、<http://docs.sun.com/app/docs/prod/entsys.5> で参照してください。

Java ES コンポーネントのアンインストール

この章では、Java ES インストーラを使用してインストールした Sun Java™ Enterprise System (Java ES) コンポーネントをアンインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 99 ページの「アンインストーラのしくみ」
- 101 ページの「前提条件の確認」
- 102 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
- 110 ページの「グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行」
- 112 ページの「サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行」
- 113 ページの「Java ES レポートのアンインストール」

アンインストーラのしくみ

Java ES には、Java ES インストーラを使用してシステムにインストールした Java ES コンポーネントを削除するためのアンインストールプログラムが用意されています。

アンインストーラの制限

Java ES インストーラと同じく、アンインストーラは、グラフィカルまたはサイレントモードで実行できます。

- アンインストーラによって削除されるのは、Java ES インストーラによってインストールされた Java ES コンポーネントだけです。Java ES インストーラを使用せずにインストールした Java ES コンポーネントの削除については、各 Java ES コンポーネントのマニュアルに記載されている操作手順を参照してください。
- アンインストーラの実行は、Java ES コンポーネントがインストールされている個々のホストごとに行う必要があります。リモートアンインストールはサポートされていません。削除する Java ES コンポーネントを、ホストごとに1つまたは複数選択することができます。

- アンインストーラによって、設定ファイルとユーザーデータファイルが削除されることがあります。これらのファイルはコンポーネントによって異なります。
アンインストールプロセスが完了したあとで、一部のファイルとディレクトリの削除が必要になる場合もあります。製品別の情報については、[102 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)を参照してください。
- アンインストーラは、Java ES コンポーネントの依存関係をチェックし、依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。ただし、そのチェック対象はアンインストーラが実行されているシステムだけです。

相互依存関係の処理

アンインストーラの動作は、インストールした Java ES コンポーネント、および各 Java ES コンポーネントの相互関係によって異なります。

- アンインストーラは、同一ホストにインストールされている製品間の依存関係を認識します。アンインストールしようとするコンポーネントに依存しているコンポーネントが同一ホスト上にある場合、アンインストーラは警告を出力します。
たとえば、Portal Server がインストールされているホストから Access Manager をアンインストールしようすると、Portal Server は Access Manager がないと機能できないことを、アンインストーラが警告します。
- ほとんどの場合、ほかの Java ES コンポーネントから依存されていない Java ES コンポーネントはアンインストールできます。
たとえば、Portal Server は Access Manager に依存していますが、Access Manager は Portal Server に依存していません。Portal Server をアンインストールしようとした場合、Access Manager は Portal Server がなくても機能できるため、アンインストーラは警告を発行しません。



注意 - Java ES コンポーネントをアンインストールするときは、どの製品がその Java ES コンポーネントをサポートするように設定されているかを調べ、必要であれば追加の設定を行います。必要な追加設定を行わない場合、存在しなくなった製品をサポートするように設定された Java ES コンポーネントがシステムに残されることになります。

アンインストーラは、次の相互依存関係を認識しません。

- リモートホストからの依存関係
- 設定による依存関係

リモートホストからの Java ES コンポーネント依存関係

Java ES コンポーネントの依存関係のなかには、リモートホストに配備された Java ES コンポーネントによって解決できるものもあります。アンインストーラはこのような依存関係を認識しません。

たとえば、Directory Server をアンインストールする場合、アンインストーラは、Access Manager が Directory Server に依存することを、両製品が同じホスト上に配備されている場合でも警告しません。これは、別のホスト上の別の Directory Server インスタンスが Access Manager をサポートする「可能性がある」からです。

設定による Java ES コンポーネントの依存関係

アンインストーラは、インストール後の設定によって生じる Java ES コンポーネント間の依存関係を認識しません。

前提条件の確認

次の表は、アンインストールの前に必要なタスクを示しています。タスクによっては、ご使用の環境に適用されない場合もあります。

左の列には作業の実行順序が、右の列にはその他の有用情報や手順の参照先が、それぞれ記載されています。

表 7-1 チェックリスト

作業の説明	便利な情報または参照先
1. アンインストールする各 Java ES コンポーネントの要求や動作を確認します。	102 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
2. 設定によって生じるコンポーネント間の依存関係を調べ、データのバックアップ、依存 Java ES コンポーネントの設定変更による依存関係の解消、適切な順序での Java ES コンポーネントのアンインストールなど、適切な対応をとります。	100 ページの「相互依存関係の処理」
3. 以後のインストールでデータの再利用を考えている場合は、アンインストールする Java ES コンポーネントの設定データまたはユーザーデータをバックアップまたはアーカイブします。	102 ページの「Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認」
4. 設定ディレクトリをホストする Directory Server インスタンスが稼働していることを確認します。注: ほとんどの場合、Web コンテナと Directory Server は稼働させておきますが、その他のサーバーはアンインストール前にシャットダウンします。	アンインストールする Java ES コンポーネントの設定をアンインストーラが正しく解除するには、この Directory Server インスタンスが稼働している必要があります。

Java ES コンポーネントのアンインストール動作の確認

以下の中から関係のある表を調べて、アンインストーラが各 Java ES コンポーネントに対して行う内容を確認してください。さらに、作業手順の計画を立てて、データが紛失したり相互依存関係が消失したりすることがないようにします。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 102 ページの「Access Manager のアンインストール動作」
- 103 ページの「Application Server のアンインストール動作」
- 103 ページの「Directory Server のアンインストール動作」
- 104 ページの「Message Queue のアンインストール動作」
- 105 ページの「Monitoring Console のアンインストール動作」
- 105 ページの「Portal Server のアンインストール動作」
- 106 ページの「Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作」
- 108 ページの「Service Registry のアンインストール動作」
- 109 ページの「Web Proxy Server のアンインストール動作」
- 110 ページの「Web Server のアンインストール動作」

Access Manager のアンインストール動作

表 7-2 Access Manager のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	Directory Server のエントリは、Access Manager 固有のデータを含め、何も削除されません。
このコンポーネントに必要な その他のアンインストール	Directory Server Web コンテナ
このインストールを必要とする製品	Portal Server (Access Manager SDK と同じホスト上に存在する必要がある)
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	アンインストールによって、Web Server または Application Server 上でのみ、Access Manager のインストール設定すべてが Web コンテナから解除されます。

Application Server のアンインストール動作

表 7-3 Application Server のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データとユーザーデータ	■ インストール時に作成されたデフォルトのドメインは、アンインストール時に削除されます。 ■ アンインストール時には、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスを含め、ユーザーが作成したドメインは削除されません。 ■ アンインストールが完了するまでに、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスは停止されます。
依存関係	同一システム上に Message Queue が必要です。
このインストールを必要とする製品	Application Server を Web コンテナとして使用するよう設定されたコンポーネント: Access Manager、Portal Server。
アンインストール前の作業	設定データを保存するために、管理ドメインディレクトリのコピーを作成します。
アンインストール後の作業	システムから Application Server を完全に削除するために、残っている Application Server のログファイルとディレクトリを削除します。Application Server のディレクトリのデフォルトの場所は、<code>\JavaES-Install-Dir\appserver</code> です。 Message Queue のアンインストール後の作業については、104 ページの「Message Queue のアンインストール動作」を参照してください。

Directory Server のアンインストール動作

表 7-4 Directory Server のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データとユーザーデータ	ユーザーデータをホストする Directory Server をアンインストールする場合、Directory Server の LDAP データベースはアンインストール時に削除されます。 注意: データの損失を避けるために、アンインストール前に Directory Server 情報をバックアップする必要があります。Directory Server には、Directory Server をバックアップしたり、設定データを移行したりするためのツールやユーティリティが、いくつか用意されています。

表 7-4 Directory Server のアンインストールの詳細 (続き)

トピック	詳細
依存関係	なし
このインストールを必要とする製品	■ Access Manager ■ Portal Server
アンインストール前の作業	必要に応じて、Directory Server LDAP データベースをバックアップします。
アンインストール後の作業	あとで Directory Server を同じ場所にインストールする場合は、インストールディレクトリが存在してはいけません。同じ場所に再インストールする場合は、インストールディレクトリとすべてのカスタム設定ファイルを事前に手動で削除しなければならない場合があります。

Message Queue のアンインストール動作

表 7-5 Message Queue のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	インスタンスに固有の設定データ、ユーザーリポジトリ、およびアクセス制御ファイルはアンインストール後も残され、以後の再インストール時に再利用できます。
このコンポーネントに必要なその他のインストール	Directory Server (オプション)
このインストールを必要とする製品	Application Server (Message Queue と同じホストに存在する必要がある)
アンインストール前の作業	■ 稼働中のすべてのブローカを停止します。ユーザー名 (管理者) とパスワードの入力が求められます。<code>imqcmd shutdown bkr [-b hostName:port]</code> ■ Message Queue の再インストールを予定しておらず、各ブローカインスタンスに関連するダイナミックデータ、フラットファイルユーザーリポジトリ、アクセス制御ファイルを削除する場合は、次のコマンドを使用してこのデータを削除します。 <code>imqbrokerd -name instanceName -remove instance</code> ■ Message Queue アップグレードスクリプトを使用して Message Queue をアップグレードする場合には、使用するプロセスを書き留めておいてください。アップグレードスクリプトがインストール情報を Java ES レジストリに書き込まないからです。

表 7-5 Message Queue のアンインストールの詳細 (続き)

トピック	詳細
アンインストール後の作業	Message Queue の再インストールを予定していない場合は、Java ES コンポーネントのマニュアルで説明されているコマンドを実行してシステムをクリーンアップします。

Monitoring Console のアンインストール動作

表 7-6 Monitoring Console のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	ユーザーデータはアンインストール後も残ります。ただし、このデータは再インストールの前に削除されます。
依存関係	なし
このインストールを必要とする その他の製品	なし
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	なし

Portal Server のアンインストール動作

表 7-7 Portal Server のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データとユーザーデータ	■ 設定データはアンインストール時に削除されます。設定の解除には、Portal Server によって Access Manager 内に作成されたサービスの削除も含まれます。 ■ ユーザーチャネルのプロバイダは、アンインストール時に削除されないため、以後のインストールで再利用できます。 ■ カスタマイズ設定データには、ディスプレイプロファイル、プロパティファイル、リソース文字列などのカスタマイズデータが含まれ、これらはアンインストールによっては削除されません。設定データは以後のインストールで再利用できますが、それには Portal Server を同一ホスト上に同じ設定で再インストールする必要があります。

表 7-7 Portal Server のアンインストールの詳細 (続き)

トピック	詳細
このコンポーネントに必要な その他のアンインストール	■ Directory Server ■ Application Server または Web Server ■ Access Manager ■ Service Registry
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	Directory Server と Web コンテナが動作していることを確認します。
アンインストール後の作業	Portal Server が Web Server 内で実行されており、Portal Server だけを削除する場合、Access Manager を再起動する必要があります。詳しくは、102 ページの「Access Manager のアンインストール動作」を参照してください。

Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作

表 7-8 Portal Server Secure Remote Access のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	■ Portal Server Secure Remote Access コアコンポーネントのすべての設定データは、アンインストール時に削除されます。 ■ 配備されているすべての Web アプリケーションの配備が解除されます。 ■ Portal Server Secure Remote Access のゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各サブコンポーネントの設定データには、ユーザーはアクセスできません。

表 7-8 Portal Server Secure Remote Access のアンインストールの詳細 (続き)

トピック	詳細
このコンポーネントに必要なその他のアンインストール	■ Portal Server Secure Remote Access は Portal Server に依存しているため、Portal Server と別個にアンインストールすることができません。 ■ Portal Server、Secure Remote Access ゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各サブコンポーネントは、Access Manager SDK に依存しています。 ■ Portal Server と Portal Server Secure Remote Access サポートは、同一ホスト上の同一ディレクトリ内に存在している必要があります。 ■ Access Manager SDK は、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシと同じホスト上に存在している必要があります。ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシを同一ディレクトリ内に置くことはできません。 ■ Portal Server Secure Remote Access のコンポーネントは、依存する Java ES コンポーネントを削除することなく、どれでも削除できます。 ■ ゲートウェイを削除しても、Access Manager SDK をホスト上に残すことができます。
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	なし

Portal Server Secure Remote Access が設定されている場合は、まず `psadmin` コマンドを使用して、Portal Server Secure Remote Access のコンポーネントを手動でアンインストールします。

▼ **SRA** コンポーネントをアンインストールするには、次の手順に従います。

- 1 **Portal Server Secure Remote Access** インスタンスを停止します。

```
stop-sra-instance --adminuser userid --passwordfile password-filename --name sra-instance-name --type instance-type --hostname instance-hostname
```
- 2 **Portal Server Secure Remote Access** インスタンスを削除します。

```
psadmin delete-sra-instance --adminuser userid --passwordfile password-filename --name sra-instance-name --type instance-type --hostname instance-hostname
```

注 – 設定済みの Portal Server Secure Remote Access コンポーネントは、アンインストーラによってアンインストールされません。設定された Portal Server Secure Remote Access コンポーネントを手動でアンインストールする必要があるのは、このためです。アンインストールを行わないと、同じホストへの後続のインストールでインストール関連の問題が発生する原因になります。

Service Registry のアンインストール動作

表 7-9 Service Registry のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	レジストリ設定プロセスは、レジストリデータベースドメインおよびサーバーキーストアを <i>JavaES-install-dir</i> ディレクトリ内にインストールします。 このディレクトリは、Service Registry をアンインストールしても削除されません。この安全メカニズムにより、将来のインストールまたはリリースで使用するために、必要に応じてデータベースを残しておくことができます。
このコンポーネントに必要な その他のインストール	Application Server (ドメイン管理サーバーとコマンド行管理ツール) HADB Message Queue
このインストールを必要とする製品	なし
アンインストール前の作業	1. 次のコマンドを使って、Service Registry ドメインを停止します。 <i>JavaES-install-dir\share\ant\bin\ant.bat -f build-install.xml appserver.domain.stop</i> 2. 次のコマンドを使って、Service Registry ドメインを削除します。 <i>JavaES-install-dir\share\ant\bin\ant.bat -f build-install.xml appserver.domain.delete</i> レジストリデータベースを将来の使用のために保存しておく場合は、レジストリを再インストールする前に、 <i>ServiceRegistry-base</i> ディレクトリを別の場所にコピーします。

表 7-9 Service Registry のアンインストールの詳細 (続き)

トピック	詳細
アンインストール後の作業	場合によっては、アンインストーラではインストールファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。最終的なクリーンアップを行うには、<i>ServiceRegistry-base</i> ディレクトリとその内容を削除します。 Service Registry データベース、ドメイン、およびキーストアが格納されたディレクトリは、レジストリのアンインストール時に削除されません。 必要であれば、このディレクトリを手動で削除してもかまいません。ただし、このデータベースを保存しておき、将来のインストール時やリリース時に使用するには、レジストリの再インストール前にそれらのディレクトリを別の場所にコピーし、再インストール後にそれを元の場所にコピーして戻します。 データベースとキーストアファイルの復元後、プラットフォーム固有のバリエーションを使用して次のコマンドを実行します。 <pre>JavaES-install-dir\share\ant\bin\ant.bat -f build-install.xml appserver.domain.stop export.registryOperatorCert install.cacerts appserver.domain.start</pre>

Web Proxy Server のアンインストール動作

表 7-10 Web Proxy Server のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データ	インストール場所の下にある <i>alias</i> ディレクトリ内の証明書データベースファイルのみが維持されます。その他のファイルはすべて削除されます。
依存関係	Directory Server (省略可能。外部 LDAP アクセス制御が選択された場合)
アンインストール前の作業	Web Proxy Server のすべてのインスタンスを停止します。
アンインストール後の作業	<i>WebProxyServer-base\alias</i> ディレクトリの下に証明書データベースが保存されています。再インストールを実行する前に、この証明書データベースを移動し、古いインストールディレクトリを削除する必要があります。

Web Server のアンインストール動作

表 7-11 Web Server のアンインストールの詳細

トピック	詳細
設定データとユーザーデータ	■ Web Server 管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスは、アンインストールが完了する前に停止されます。 ■ Web Server のインストールディレクトリおよびインスタンスディレクトリは、アンインストールを実行しなければ削除できません。
このコンポーネントに必要な その他のインストール	なし
このインストールを必要とする製品	Web Server を Web コンテナとして使用するよう設定されたコンポーネント: Access Manager と Portal Server。Application Server ロードバランスプラグイン (Application Server が Web Server を Web コンテナとして使用する場合)。
アンインストール前の作業	なし
アンインストール後の作業	設定データを維持する場合は、インストールディレクトリ内の管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスのディレクトリのバックアップを行います。 アンインストール後に同じ場所に Web Server をインストールする場合は、インストールディレクトリが存在してはなりません。同じ場所に再インストールする場合は、インストールディレクトリとすべてのカスタム設定ファイルを事前に手動で削除しなければならない場合があります。

グラフィカルモードでのアンインストールプログラムの実行

101 ページの「[前提条件の確認](#)」の関連作業が完了すると、アンインストールプログラムを実行する準備が整います。

▼ Windows ウィザード/グラフィカルアンインストールプログラムを起動する

- 1 「Start」、「Settings」、「Control Panel」の順に選択します。
- 2 「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。

- 3 「Sun Java Enterprise Systems」を選択します。
- 4 「変更と削除」をクリックします。
プログラムを変更または削除するための「ようこそ」ページが表示されます。

▼ 現在のインストール内容を変更する

- 1 **InstallShield** ウィザードで、新しいプログラム機能を追加する、または現在インストールされている機能を削除するために「変更」を選択します。
- 2 「次へ」をクリックします。
コンポーネント選択ページが表示されます。
- 3 コンポーネントを確認します。
 - システムにインストールされて有効になっているコンポーネントを選択できます。システムにインストールされていないコンポーネントは選択できません。
 - コンポーネントによっては、サブコンポーネントを含むものもあります。それらのコンポーネントを展開すると、対応するサブコンポーネントが表示されます。
 - サブコンポーネントを含むコンポーネントの選択を解除したときは、コンポーネントを展開し、サブコンポーネントのリストを確認します。
- 4 インストールするコンポーネントを選択し、アンインストールするコンポーネントの選択を解除します。「次へ」をクリックします。
アンインストールプログラムにより、ソフトウェアが変更されます。

▼ インストールされているすべてのコンポーネントを削除する

- 1 **InstallShield** ウィザードで「削除」を選択します。
- 2 「次へ」をクリックします。
確認ダイアログボックスが表示されます。
- 3 「はい」をクリックして削除を確認します。
「セットアップステータス」ページが表示され、次に「設定解除」ダイアログボックスが表示されます。

- 4 「はい」をクリックして **Java ES** コンポーネントの設定解除を確認します。
これらの製品が設定解除されたあと、サーバーが停止され、削除されます。
- 5 ウィザードの「完了」ページが表示されます。「サマリーの表示」ボタンをクリックすると、インストールまたはアンインストールの詳細事項のサマリーを表示できます。
- 6 「完了」をクリックして、アンインストールウィザードを終了します。

サイレントモードでのアンインストールプログラムの実行

サイレントアンインストールは、設定内容が似ている複数のホスト上の Java ES コンポーネントをアンインストールする場合に便利です。サイレントモードでのアンインストール手順は、[第4章](#)で説明したサイレントモードでのインストール手順に似ています。

▼ サイレントモードでアンインストールを実行する

- 1 インストーラが存在するディレクトリに移動します。
`cd JavaES-install-dir`
- 2 `Setup.bat /r` コマンドを使用して、応答ファイルを作成します。
応答ファイルを作成する場所と応答ファイルの名前を指定するには、`/f1` オプションを使用します。予期しない結果を回避するため、`.iss` 拡張子を持つファイルの絶対パスを指定してください。たとえば、次のように入力します。

`Setup.bat /r /f1"C:\Temp\UninstallExample.iss "`
入力したデータと選択したオプションがすべて、`.iss` ファイルに記録されます。
- 3 以上で、レコードのアンインストール中に選択したオプションで応答ファイルを使用する準備が整いました。記録したオプションを変更するために、この応答ファイルを手動で編集することもできます。
これで、応答ファイルを使用して、サイレントアンインストールを開始できます。
- 4 インストーラが存在するディレクトリに移動します。
`cd JavaES-install-dir`

- 5 Setup.bat /s コマンドを入力して、サイレントモードでのアンインストール手順を開始します。

.iss ファイルの場所を指定するには、/f1 オプションを使用します。予期しない結果を回避するために、絶対パスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
Setup.bat /s /f1"C:\Temp\UninstallExample.iss" .
```

- 6 (省略可能) ログファイルの別の名前と場所を指定するには、/f2 オプションを使用します。予期しない結果を回避するために、ファイルの絶対パスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
Setup.bat /s /f1"C:\Temp\UninstallExample.iss /f2" C:\Setup.log"
```

アンインストーラの実行中、インストールログの変化に注意することによって、進行状況を監視することができます。

Java ES レポータのアンインストール

Java ES Reporter は Java ES インストーラによって管理されるコンポーネントではないため、アンインストーラを使用してレポータを削除することはできません。

▼ Java ES レポータをアンインストールする

- 1 レポータを無効にします。
76 ページの「[Java ES レポータのインストール後の設定](#)」で説明している手順に従います。
- 2 管理者として次のファイルを削除します。
 - commons-codec-1.3.jar
 - commons-httpclient-3.0.jar
 - mfwk_reporter.jar
 - config.properties
 - job_measurement_reporter
 - com.sun.mjwk.reporter
 - config_state.properties

トラブルシューティング

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) のインストールとアンインストールに関する問題を解決するためのヒントを提供します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 115 ページの「一般的なトラブルシューティング方法」
- 119 ページの「インストールに関する問題」
- 122 ページの「コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報」
- 128 ページの「トラブルシューティングの追加情報」

一般的なトラブルシューティング方法

ここでは、問題の原因を見つけるための一般的なガイドラインについて説明します。ここでは、次の内容について説明します。

- 115 ページの「ネットワークの接続性」
- 116 ページの「Directory Server の接続性チェック」
- 116 ページの「インストール後の設定のチェック」
- 116 ページの「リソースと設定のチェック」
- 116 ページの「配布メディアのチェック」
- 117 ページの「コンポーネントログファイルの検証」
- 117 ページの「インストールログファイルの検証」
- 118 ページの「ファイルおよびディレクトリの削除」
- 118 ページの「パスワードの確認」
- 118 ページの「コンポーネントの依存関係の検証」

ネットワークの接続性

Java ES のインストールは、スタンドアロンホストではサポートされません。Java ES をインストールするには、ネットワークに接続されたホストが必要です。

Directory Server の接続性チェック

Directory Server に依存するコンポーネントをインストールする場合、次のいずれかの状況によって問題が発生する可能性があります。

- Directory Server に対して不正なユーザー ID およびパスワードを指定した。
- 不正な LDAP ポートを指定した。
- Directory Server に接続できない。

「インストール後に手動で設定」モードの場合は、Directory Server に依存する製品を設定する前に、Directory Server が稼働していることを確認する必要があります。

インストール後の設定のチェック

コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、[第5章](#)に記述されている手順を正しく実行したかを確認します。

リソースと設定のチェック

次のホストレベルの問題は、インストール時に問題を引き起こす可能性があります。

- アップデート: 推奨サービスパックがインストールされているか。
- ディスク容量: ディスクパーティションをどのように設定し、どのパーティションにインストールディレクトリを作成するか。
- ネットワークポート: 設定時に、Java ES コンポーネントのポート番号を指定します。次のように、ポート情報が正しいことを確認します。
 - ファイル内の標準ポート番号を調べます。
 - サマリーログファイルを参照し、標準の設定と比較します。ポート番号を誤って入力していませんか、または通常は別のポートで使用するサーバーにそのポートを設定していませんか。
 - `netstat -a` コマンドを使用して、現在システムで使用しているポートを調べます。すでにほかで使用中のポート番号を割り当てていませんか。
 - 設定中に、正しいホスト名とドメイン名を入力したことを確認してください。

[23 ページ](#)の「システム要件」を参照して、インストールに進む前にすべての要件を満たしていたかどうかチェックしてください。

配布メディアのチェック

DVD からのインストールでは、メディアの汚れや損傷を調べます。ディスクに汚れがあると、インストール時に問題が発生する可能性があります。

コンポーネントログファイルの検証

コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、ログファイルを調べます。[122 ページ](#)の「コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報」には、多くのコンポーネントログファイルの一覧が示されています。

インストールログファイルの検証

インストールまたはアンインストール中に問題が発生する場合は、`%TEMP%\SunJavaES.log` ファイル内の対応するログをチェックします。

`%TEMP%` は、そのシステム上のユーザー定義の TEMP フォルダです。

アンインストーラとインストーラのログファイルを、Java ES 設定ログとともに検証すると、問題の原因の特定に役立ちます。

▼ インストールログファイルを検証する

- 1 インストールのサマリーファイルを参照します。このファイルには、何がインストールされ、設定されているかについての概要が記載されています。このファイルは、`JavaEs-install-dir\Summary.txt` にあります。問題が発生した場合は、どのコンポーネントが問題の原因であるかを確認します。複数の問題が発生している場合は、最初の問題を特定します。
- 2 詳細なログファイルを参照します。
 - a. 最初に発生したエラーまたは警告を探して、解決を試みます。1つのエラーを解決すると、関連性がないように見える後続の多数のエラーも解決することがよくあります。
 - b. 問題の原因となっているコンポーネントの名前を見つけます。
 - c. 設定プログラムのログを確認します。設定ログは、コンポーネントのインストールディレクトリにあります。コンポーネントログファイルの正確な場所については、`Summary.txt` を参照してください。
 - d. インストールまたはアンインストールの問題に関しては、インストーラのログファイルを確認します。設定関連の問題については、設定ログを参照してください。

ファイルおよびディレクトリの削除

編集済みの設定ファイルなど、カスタマイズされたファイルの上書きを防ぐため、Java ES 5 のコンポーネントは、ファイルが格納されているそれぞれのインストールディレクトリにはインストールできません。

Java ES 5 を再インストールする場合は、インストールディレクトリをチェックして、ディレクトリが空であることを確認します。ディレクトリが空でない場合は、どこか別の場所にファイルをアーカイブしてからインストールを再試行します。

パスワードの確認

インストーラは、コンポーネントごとにパスワードの入力を求めます。複数のホストに複数のコンポーネントをインストールする場合、必ず各ホストで正しいパスワードを入力してください。

パスワードの問題を解決するには、いったんアンインストールしてから再インストールすることが必要となる場合があります。アンインストールに失敗した場合は、[119 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」](#)を参照してください。

コンポーネントの依存関係の検証

多数のコンポーネントに、インストール時の相互依存関係があります。1つのコンポーネントに影響を与える問題は、別のコンポーネントにも影響を与える可能性があります。満たされていない相互依存関係がないかをチェックするには、[20 ページの「依存性の確認」](#)をよくお読みください。そのあと、次の手順を実行してください。

- サマリーファイルとログファイルを確認して、関連するコンポーネントに問題が発生していないかどうかを確認します。これにより、最初に解決すべきことの手がかりが得られる可能性があります。
- 正しい接続情報を指定しているかどうかチェックします。次に例を示します。
 - Directory Server の設定時に指定した情報は、Directory Server を使用するコンポーネントに指定したディレクトリ情報と一致しているか。
 - Portal Server または Portal Server Secure Remote Access に指定した Access Manager の情報は、Access Manager に指定した情報と一致しているか。

インストールに関する問題

ここでは、インストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 119 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」
- 120 ページの「Windows インストーラのエラー」
- 120 ページの「サイレントインストールの失敗」
- 121 ページの「サイレントインストールの失敗: 「応答ファイルに互換性がないか、破損している」」
- 121 ページの「予期しない外部エラー」

アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗

アンインストールに失敗すると、削除されるはずだったコンポーネントがホストシステム上に残る可能性があります。このような場合は、Java ES を再インストールする前に、コンポーネントを手動で削除する必要があります。

▼ 残されたファイルを削除する

以前にインストールまたは設定解除に失敗している場合は、Java ES を再インストールする前に、次のクリーンアップ手順を実行する必要があります。

- 1 **Java ES** サービスがすべて停止され、「コントロールパネル」>「管理ツール」>「サービス」から削除されていることを確認します。
- 2 以前にインストールされた **Sun** フォルダが存在する場合は、すべて削除します。フォルダを削除できない場合は、システムを再起動してからフォルダを削除します。
- 3 残されたサービスエントリがないかどうかチェックします。「サービス」にサービスエントリが残っている場合は、エントリを削除してレジストリをクリーンアップする必要があります。次の表に、残される可能性のあるエントリを示します。

コンポーネント名	サービスエントリ
共通エージェントコンテナ	Common Agent Container 2 (#CRC: デフォルト)
HADB	HADB4.4MgmtAgent
Message Queue	MQ3.7UR1_Broker

コンポーネント名	サービスエントリ
Portal Server	<i>sra.gateway.srainstance</i> <i>sra.netletproxy.srainstance</i> <i>sra.rewriterproxy.srainstance</i>
WebAdminServer	https-admserv70
Web Console	Web Console 3.0.2 console
Web Proxy Server	Sun Java System Socks Server 4.0.4 (server1) Sun Java System Web Proxy Server 4.0.4 (proxy-server1) Sun Java System Web Proxy Server 4.0.4 Administration Server
Web Server	Sun Java System Web Server 7.0 (https-hostname.domainname) Sun Java System Web Server 7.0 Administration Server

- レジストリをクリーンアップします。
HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Sun Microsystems\Entsys5\Installer を削除します。
- 上記のいずれかの手順を実行した場合は、インストールを開始する前にシステムを再起動します。

Windows インストーラのエラー

インストールは、次の Windows インストーラエラーが原因で失敗することがあります。

- エラー 1603. インストール中に重大なエラーが発生しました: このエラーは、ターゲットホストが Windows 2003 Enterprise Server SP1 の場合に発生します。考えられる原因については、<http://support.microsoft.com/kb/834484/ja> を参照してください。

この場合は、次のリンクから Windows 2003 Enterprise Server SP1 の更新プログラムをインストールする必要があります:<http://support.microsoft.com/kb/898715>。

サイレントインストールの失敗

応答ファイルを編集した場合は、そのためにエラーが発生した可能性があります。たとえば、次の点をチェックしてください。

- すべてのローカルホストパラメータが設定され、矛盾のない値が設定されているか。
- パラメータ値の大文字、小文字の区別は適切か。
- 目的のパラメータを入力せずに、必須のパラメータを削除してしまっていないか。
- 使用するすべてのポート番号は有効であり、かつ割り当て済みではないか。

問題を解決し、[66 ページ](#)の「[応答ファイルの作成](#)」に説明されている方法で応答ファイルを再生成します。

サイレントインストールの失敗: 「応答ファイルに互換性がないか、破損している」

使用時と同じプラットフォーム上で作成された応答ファイルを使用している場合、不明なファイルの破損エラーが原因で問題が発生している可能性があります。新しい応答ファイルを生成して再インストールしてみてください。

詳しくは、[66 ページ](#)の「[応答ファイルの作成](#)」を参照してください。

予期しない外部エラー

外部エラーの考えられる原因は、次のとおりです。

- 電源障害またはシステム障害
- インストーラプロセスを停止させるために Control-C を押したか、タスクマネージャーからインストーラを強制終了した

インストールまたは設定プロセス中に障害が発生した場合は、おそらく一部だけがインストールされた状態になっています。アンインストールプログラムを実行してください。アンインストールプログラムが失敗する場合は、[119 ページ](#)の「[アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗](#)」にある手順に従います。

Java DB の再起動後、ポータルデータベースが見つからない

これは、デフォルトの Application Server コマンドを使用して Java DB を再起動した (asadmin stop-database、次に asadmin start-database) あとで、Java DB を使用する Application Server サンプルを配備したときに発生することがあります。Portal Server サンプルにアクセスできなくなります。

対処方法:次の回避策のいずれかを使用します。

- Java DB を停止しないでください。
- JavaDB を停止した場合は、Application Server データベースを別の場所で作成できるよう、次のコマンドを使用して JavaDB を再起動します。

```
asadmin start-database --dbhome JavaES-Install-Dir \portal\data\derby
```

- デフォルトの場所のデータベースを使用するには、デフォルト以外のポートを使用して Java DB の 2 つめのインスタンスを起動し、そのポートを Application Server サンプルに指定します。たとえば、次のように入力します。

```
asadmin start-database --dbport 1528
```

コンポーネントのトラブルシューティングに関する情報

ここでは、コンポーネントのトラブルシューティングについてのさまざまなヒントを提供し、役立つマニュアルを紹介します。

- [122 ページの「Access Manager のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [123 ページの「Application Server のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [124 ページの「Directory Server のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [124 ページの「HADB のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [125 ページの「Message Queue のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [125 ページの「Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [126 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [126 ページの「Portal Server のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [127 ページの「Service Registry のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [127 ページの「Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント」](#)
- [128 ページの「Web Server のトラブルシューティングのヒント」](#)

Access Manager のトラブルシューティングのヒント

表 8-1 Access Manager のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
設定ファイル	<i>AccessManager-base</i> \Config\AMConfig.properties

表 8-1 Access Manager のトラブルシューティングのヒント (続き)

トピック	詳細
ログファイルとデバッグファイル	ログファイルのディレクトリ: <i>AccessManager-base\Logs</i> デバッグファイルのディレクトリ: <i>AccessManager-base\Debug</i>
デバッグモード	『Sun Java System Access Manager Developer's Guide』を参照してください。

Application Server のトラブルシューティングのヒント

表 8-2 Application Server のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	ログファイルのディレクトリ: <i>JavaES-Install-Dir\appserver\domain\domain1\logs</i> メッセージログのファイル名: <i>server.log</i> (サーバーインスタンスごとに存在する)
設定ファイル	設定ファイルのディレクトリ: <i>ApplicationServer-base\Config</i>
トラブルシューティング	『Sun Java System Application Server Enterprise Edition トラブルシューティングガイド』を参照してください。

Directory Server のトラブルシューティングのヒント

表 8-3 Directory Server のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	インストールログファイルは、tmp フォルダに格納されています。 設定ログファイル: ■ DirectoryServer-base.Atimestamp ■ DirectoryServer-base.Btimestamp ログファイルの管理については、『Sun Java System Directory Server 管理ガイド』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Directory Server 管理ガイド』を参照してください。

HADB のトラブルシューティングのヒント

表 8-4 HADB のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	JavaES-install-dir\Hadb\4.4.3-5\ma\ma.log
設定ファイル	■ HADB.properties ■ mgt.cfg これらのファイルは、JavaES-install-dir\Hadb\4.4.3-5\lib\ディレクトリにあります。
実行ファイルの場所	JavaES-install-dir\Hadb\4.4.3-5\bin\
トラブルシューティング	『High Availability Session Store Administrator's Guide』を参照してください。

Message Queue のトラブルシューティングのヒント

表 8-5 Message Queue のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	インストールログファイル: <i>MessageQueue-base\var\instances\instance-name\log</i> 『Sun Java System Message Queue 3.7 UR1 管理ガイド』を参照してください。
トラブルシューティング	パフォーマンスの問題については、『Sun Java System Message Queue 3.7 UR1 Administration Guide』の第 11 章「Analyzing and Tuning a Message Service」を参照してください。 Message Queue のトラブルシューティングについては、『Sun Java System Message Queue 3.7 UR1 Administration Guide』の第 12 章「Troubleshooting Problems」、および Message Queue Forum (http://swforum.sun.com/jive/forum.jspa?forumID=24) を参照してください。 http://developers.sun.com/prodtech/msgqueue/reference/techart/index.html にあるナレッジベースでは、詳細な記事を読むこともできます。

Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント

表 8-6 Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
設定ファイル	Monitoring Console の場合: ■ <i>MonitoringConsole-base\WEB-INF\web.xml</i> Monitoring Framework の場合: ■ <i>JavaES-install-dir\share\mfwk\config\mfwk.properties</i>

表 8-6 Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント (続き)

トピック	詳細
ログファイル	Monitoring Console の場合: ■ <i>JavaES-install-dir\share\webconsole\console\console_config_log</i> Monitoring Framework の場合: ■ <i>JavaES-install-dir\share\mfwk\logs</i>
トラブルシューティング	Monitoring Console にアクセスできない場合は、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Console のトラブルシューティング」を参照してください。Monitoring Console のトラブルシューティングについては、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Framework のトラブルシューティング」を参照してください。

Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント

表 8-7 Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
デバッグログ	ポータルゲートウェイのデバッグログは、 <i>PortalServer-base\debug</i> ディレクトリにあります。 注 - Access Manager 管理コンソールからログインをオンにした場合、NetFile などの Portal Server サービスのログは、 <i>AccessManager-base\debug</i> ディレクトリに作成されます。

Portal Server のトラブルシューティングのヒント

表 8-8 Portal Server のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイルとデバッグファイル	Portal Server のログファイルは次の場所にありません。 ■ psadmin ログ: <i>PortalServer-base\data\admin</i> ■ 設定ログ: <i>PortalServer-base\data\config</i> ■ Portal Server インスタンスログ: <i>PortalServer-base\data\portals\portal-id\logs\instance-id</i>

Service Registry のトラブルシューティングのヒント

表 8-9 Service Registry のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	デフォルトのログファイル: <i>ServiceRegistry-base\domains\registry\logs\server.log</i> 詳しくは、『Service Registry 3.1 管理ガイド』を参照してください。
トラブルシューティング	『Service Registry 3.1 管理ガイド』を参照してください。

Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

表 8-10 Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	デフォルトのログファイル: ■ <i>JavaES-install-dir\instance-name\config\logs\errors</i> ■ <i>JavaES-install-dir\instance-name\config\logs\access</i> ■ <i>JavaES-install-dir\admin-name\config\logs\errors</i> ■ <i>JavaES-install-dir\admin-name\config\logs\access</i> 詳しくは、『Sun Java System Web Proxy Server 管理ガイド』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Web Proxy Server 管理ガイド』を参照してください。

Web Server のトラブルシューティングのヒント

表 8-11 Web Server のトラブルシューティングのヒント

トピック	詳細
ログファイル	errors ログファイルと access ログファイルは、 <i>WebServer-base\WebServer_Install.log</i> ディレクトリにあります。 errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーが一覧表示されます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳しくは、『Sun Java System Web Server 7.0 管理ガイド』を参照してください。
トラブルシューティング	『Sun Java System Web Server 7.0 Troubleshooting Guide』を参照してください。
設定ファイルのディレクトリ	<i>WebServer-base\https-instance-name\config</i>

トラブルシューティングの追加情報

このマニュアルに記載されている次の追加情報も、トラブルシューティングに役立ちます。

- [第 5 章](#)には、インストール後設定の実行手順が含まれています。
- [第 6 章](#)では、インストールした Java ES コンポーネントの確認手順について説明しています。
- [第 7 章](#)では、Java ES ソフトウェアのアンインストール時に発生する可能性のある問題について説明しています。



このリリースの Java ES コンポーネント

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアに含まれる選択可能なコンポーネントと共有コンポーネントの一覧を示します。

Java ES コンポーネント

Java ES 5 インストーラの「コンポーネントの選択」ページでは、Java ES コンポーネントが、支援するサービス別にグループ分けされています。Java ES コンポーネントのインストール時にともにインストールされるサブコンポーネントは、それぞれ次のとおりです。

- Sun Java System Portal Server 7.1
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 7.1
 - ゲートウェイ
 - Netlet プロキシ
 - Rewriter プロキシ
- Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2
 - ドメイン管理サーバー
 - Application Server ノードエージェント
 - コマンド行管理ツール
 - ロードバランスプラグイン
 - サンプルアプリケーション
- Sun Java System Web Server 7.0
 - Web Server 7.0 CLI
 - Web Server 7.0 コア
 - Web Server サンプル
- Sun Java System Web Proxy Server 4.0.4
- Sun Java System Message Queue 3.7 UR1

- Service Registry 3.1
 - Service Registry クライアントサポート
 - Service Registry 配備サポート
- Sun Java System Access Manager 7.1
 - アイデンティティ管理とポリシーサービスコア
 - Access Manager 管理コンソール
 - 連携管理の共有ドメインサービス
 - Access Manager SDK
 - 分散認証
 - クライアント SDK
 - セッションフェイルオーバークライアント
- Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0
 - Sun Java ES Directory Server 6.0 Core Server
 - Sun Java ES Directory Service Control Center
 - Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 コマンド行ユーティリティ
 - Java Enterprise System Directory Proxy Server 6.0 Core Server
- Sun Java System Monitoring Console 1.0
- Java DB 10.2
 - Java DB サーバー
 - Java DB クライアント
- HA Application Server Enterprise Edition (HADB)

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、Java ES コンポーネントにローカルサービスとテクノロジーサポートを提供します。Java ES 5 コンポーネントをインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、インストーラは自動的にそれらの共有コンポーネントをインストールします。

このリリースの Java ES 5 には、次の共有コンポーネントが含まれています。

- ANT (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール) 1.6.6
- Apache 共通ロギング (ACL) 1.0.4
- Berkeley Database (Berkeley DB) 4.2.52
- Common Agent Container 2.0
- FastInfoSet 1.0.1
- ICU (International Components for Unicode) 2 2.1.9
- ICU 33.2
- J2SE™ (Java 2 Platform, Standard Edition) platform 5.0 Update 9

- JavaBeans™ Activation Framework (JAF) 1.1
- Java Studio Web Application Framework (JATO) 2.1.5
- JavaHelp™ Runtime 2.0
- JavaMail™ Runtime 1.4.0
- JAXB (Java API for XML Binding) Runtime 2.0
- Java API for XML Parsing (JAXP) 1.3.1
- JAXR (Java API for XML Registries) Runtime 1.0.8
- JAXRPC (Java API for XML-based Remote Procedure Call) Runtime 1.1.3_01
- JAXWS (Java API for Web Services) Runtime 1.0.8
- JDMK (Java Dynamic Management Kit) Runtime 5.1_01
- JSS (Java Security Services) 4.2.3
- JSS3 (Network Security Services for Java) 4.6.1
- JSTL (JSP™ Standard Library Template) 1.0
- KTSE (KT Search Engine) 1.3.2
- LDAP C SDK 5.15
- LDAP Java SDK 4.19
- MA (Mobile Access) Core 1.0.6
- NSPR (Netscape Portable Runtime) 4.6
- NSPRD (Netscape Portable Runtime Development) 4.6
- NSS (Network Security Service) 3.11
- NSSU (Network Security Service Tools) 3.11
- SOAP with Attachments API for Java (SAAJ) 1.3
- SASL (Simple Authentication and Security Layer) 2.19
- Monitoring Framework
- Sun Java Web Console 3.0
- WSCL (Web Services Common Library) 2.0
- XWSS (XML Web Services Security)

デフォルトのディレクトリとポート

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアの Windows オペレーティングシステムでのデフォルトのディレクトリとポートについて説明します。

デフォルトのパスとファイル名

次の表は、このマニュアルで使用するデフォルトのパスやファイル名について説明したものです。

表 B-1 デフォルトのパスとファイル名

ブレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>JavaES-install-dir</i>	Java ES のベースインストールディレクトリを表します。	C:\Program Files\Sun\JavaES5
<i>AccessManager-base</i>	Access Manager のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir</i> \identity
<i>ApplicationServer-base</i>	Application Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir</i> \appserver
<i>DirectoryServer-base</i>	Directory Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir</i> \DSEE
<i>DirectoryProxyServer-base</i>	Directory Proxy Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir</i> \DSEE
<i>HADB-base</i>	HADB のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir</i> \HADB

表 B-1 デフォルトのパスとファイル名 (続き)

プレースホルダ	説明	デフォルト値
<i>JavaDB-base</i>	Java DB のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\JavaDB</i>
<i>MessageQueue-base</i>	Message Queue のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\mq</i>
<i>MonitoringConsole-base</i>	Monitoring Console のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\jesmc</i>
<i>PortalSever-base</i>	Portal Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\portal</i>
<i>ServiceRegistry-base</i>	Service Registry のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\srcv-registry</i>
<i>WebServer-base</i>	Web Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\WebServer7</i>
<i>WebProxyServer-base</i>	Web Proxy Server のベースインストールディレクトリを表します。	<i>JavaES-install-dir\webproxyserver</i>

デフォルトのポート番号

Java ES インストーラは、ポート番号の指定をユーザーに求める際、使用中のポートの実行時チェックを実行して適切なデフォルト値を表示します。別のコンポーネント、または同じ Java ES コンポーネントの別のインスタンスがデフォルトのポート番号を使用している場合、インストーラは別の値を示します。

次の表は、デフォルトの Java ES コンポーネントのポート番号、および各ポートの目的を示しています。

注 - Portal Server は、配備先の Web コンテナのポート番号付けを使用するため、この表には含まれません。

表 B-2 デフォルトのポート番号

コンポーネント	ポート	目的
Application Server	8080	標準の HTTP ポート
	3700	標準の IIOP ポート
	4849	管理サーバーのポート
	7676	標準の Message Queue ポート
	8686	JMX ポート
	8181	HTTPS ポート
共通エージェントコンテナ	11162	JMX ポート (TCP)
	11161	SNMP アダプタポート (UDP)
	11162	トラップ用 SNMP アダプタポート (UDP)
	11163	コマンドストリームアダプタポート (TCP)
	11164	RMI コネクタポート (TCP)
Directory Proxy Server	1389	標準の LDAP リスナー
	1636	LDAPS over SSL
Directory Server	1390	標準の LDAP リスナー
	1637	LDAPS over SSL
Directory Server Control Center	6789	Sun Java Web コンソールリスナー
HADB	1862	管理エージェントのポート (JMX)
	15200	デフォルトのポートベース
Java DB	1527	Apache Derby と兼用
Message Queue	80	標準の HTTP ポート
	7676	ポートマッパー
	7674	HTTPS トンネリングサブレットポート
	7675	HTTP トンネリングサブレットポート

表 B-2 デフォルトのポート番号 (続き)

コンポーネント	ポート	目的
Monitoring Console	6789	Sun Java Web コンソール経由でのアクセス
	8765	マスターエージェント Web サービスアダプタ用 Job Factories のポート
	11161	Monitoring Framework 用の SNMP ポート
	11164	Monitoring Framework 用の RMI ポート
	54320	Monitoring Framework 発見プロトコル用のマルチキャストポート
Portal Server Secure Remote Access	443	HTTP over SSL
	10443	Rewriter プロキシポート
	10555	Netlet プロキシポート
Service Registry	6480	HTTP ポート
	6443	HTTPS ポート
	6484	Message Queue ポート
	6485	IIOP ポート
	6486	IIOP SSL ポート
	6487	IIOP 相互認証ポート
	6488	JMX ポート
	6489	Application Server ドメインの管理ポート
Web Proxy Server	8888	管理ポート
	8080	プロキシインスタンスポート
Web Server	8800	管理 HTTP ポート
	8989	管理 SSL ポート。管理サーバーの場合、SSL ポートは必須ですが、HTTP ポートはオプションです。
	80	インスタンス HTTP ポート

応答ファイルの例: サイレントインストール

この付録では、サイレントインストール用に準備された応答ファイルの一例を示します。

応答ファイルの例

```
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-DlgOrder]
Dlg0={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdWelcome-0
Count=9
Dlg1={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdLicense2-0
Dlg2={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdAskDestPath-0
Dlg3={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdSetupType2-0
Dlg4={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdConfigure-0
Dlg5={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdStartCopy-0
Dlg6={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdStartCopy2-0
Dlg7={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdShowInfoList-0
Dlg8={EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdFinish-0
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdWelcome-0]
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdLicense2-0]
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdAskDestPath-0]
InstallDir=C:\Program Files\Sun\
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdSetupType2-0]
Installation_Type=DEFAULT
Result=304
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdConfigure-0]
Administrator User ID=Admin
Administrator Password=wipro123
RetypePassword=wipro123
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdStartCopy-0]
```

```
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdStartCopy2-0]
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdShowInfoList-0]
Result=1
[{EB05D453-81D0-4F5B-A38C-10C4E6C7DF68}-SdFinish-0]
Result=1
```

索引

A

Access Manager

- Directory Server を使用する例 (単一セッション), 47-49

- Portal Server と別ホスト, 51-52

- アンインストール動作, 102-103

- インストール後の設定, 73-74

- 起動と停止, 84

- トラブルシューティング, 122-123

ACL (Apache 共通ログイン), 130-131

amsamplesilent ファイル, amconfig, 47

ANT, 130-131

Apache Derby Database, 130-131

Apache Web Server, 36-37

Apache 共通ログイン (ACL), 130-131

Application Server

- アンインストール動作, 103

- インストール後の設定, 74

- 起動と停止, 84-85

- デフォルトのポート, 135

- トラブルシューティング, 123-124

- 負荷分散用 Apache Web Server, 36-37

- 例 (単一セッション), 36-37

B

Berkeley Database, 130-131

C

Common Agent Container, 130-131

D

Delegated Administrator, 47-49

Directory Preparation Tool, 38-39

Directory Proxy Server

- インストール後の設定, 75

- 起動と停止, 86-87

- デフォルトのポート, 135

- 例 (単一セッション), 37-38

Directory Server

- Access Manager を使用する例 (単一セッション), 47-49

- Schema 2、インストールシーケンス, 38

- アンインストール動作, 103-104

- インストール後の設定, 75-76

- 起動と停止, 86

- 接続性、トラブルシューティング, 116

- デフォルトのポート, 135

- トラブルシューティング, 124

- 例 (単一セッション), 38-39

Directory Server の暗号化, 38-39

Directory Server のレプリケーション, 38-39

F

FastInfoSet, 130-131

H

HADB

- 起動と停止, 87

- デフォルトのポート, 135

High Availability Session Store, トラブルシューティング, 124-125

I

ICU バージョン, 130-131

J

J2SE, 130-131

JAF, 130-131

JATO, 130-131

Java DB, 121-122, 129-130

- デフォルトのポート, 135

Java ES

- インストールの例, 29-52

- 入手、ソフトウェア, 27

JavaHelp Runtime, 130-131

JavaMail Runtime, 130-131

Java 仮想マシン (JVM) の調整, 82

JAX 共有コンポーネント, 130-131

JCAPI, 130-131

JDMK, 130-131

JSS 共有コンポーネント, 130-131

JSTL, 130-131

JVM, 設定, 82

JVM の調整, 82

K

KT Search Engine (KTSE), 130-131

L

LDAP C SDK, 130-131

LDAP Java SDK, 130-131

M

MA コア, 130-131

Message Queue

- アップグレード, 39-40

- アンインストール動作, 104-105

- インストール後の設定, 77

- 起動と停止, 88-89

- 単独でインストール, 39-40

- デフォルトのポート, 135

- トラブルシューティング, 125

- 例 (単一セッション), 39-40

Monitoring Console

- アンインストール動作, 105

- インストール後の設定, 72

- デフォルトのポート, 136

- トラブルシューティングのヒント, 125-126

- 例 (単一セッション), 40-41

Monitoring Framework, 72, 130-131

N

NS 共有コンポーネント, 130-131

P

Portal Server

- Access Manager と別ホスト, 51-52

- アンインストール動作, 105-106

- インストール後の設定, 77-80

- 起動と停止, 91-92

- サンプルが見つからない, 121-122

- トラブルシューティング, 126-127

- 例 (単一セッション), 32-36

Portal Server Secure Remote Access

- アンインストール動作, 106-108

- インストール後の設定, 77-80

- 起動と停止, 90-91

- デフォルトのポート, 136

- トラブルシューティング, 126

- 例 (単一セッション), 41-43

Portal Server デスクトップ, 起動と停止, 89-90

S

SAAJ, 130-131
 SASL, 130-131
 Schema 2, 38
 Service Registry
 アンインストール動作, 108-109
 設定, 80
 デフォルトのポート, 136
 トラブルシューティング, 127
 例 (単一セッション), 43-44
 setup.log、ログファイル, 69-70
 SOAP for Java (SAAJ), 130-131
 Sun Explorer Data Collector, 130-131
 Sun Java Monitoring Framework, 130-131
 Sun Java Web Console, 130-131

W

Web Proxy Server
 アンインストール動作, 109-110
 起動と停止, 93-94
 設定, 80-81
 デフォルトのポート, 136
 Web Server
 64 ビットサポート, 81
 アンインストール動作, 110
 インストール後の設定, 81
 起動と停止, 95-98
 デフォルトのポート, 136
 トラブルシューティング, 128
 例 (単一セッション), 44
 Web Server に対する 64 ビットサポート, 81
 Web とアプリケーションサービス、例, 49-50
 Windows, 配布内容, 25-27
 WSCL, 130-131

X

XWSS, 130-131

あ

アクセス権、インストール, 23
 アップグレード, 21-22
 アンインストーラ、概要, 23
 アンインストーラの制限, 99-100
 アンインストール, 99-113
 Access Manager の動作, 102-103
 Application Server の動作, 103
 Directory Server の動作, 103-104
 Message Queue の動作, 104-105
 Monitoring Console の動作, 105
 Portal Server Secure Remote Access の動作, 106-108
 Portal Server の動作, 105-106
 Service Registry の動作, 108-109
 Web Proxy Server の動作, 109-110
 Web Server の動作, 110
 概要, 99-101
 グラフィカルインタフェース, 110-112
 コンポーネントの動作, 102-110
 サイレントモード, 112-113
 応答ファイルの生成, 112-113
 製品コンポーネント, 99-113
 前提条件, 101-102
 相互依存関係の処理, 100-101
 トラブルシューティング, 115-128
 部分的なアンインストールのクリーンアップ, 119-120

い

依存性の確認, 20-21
 依存性の確認とインストーラ, 20-21
 インストーラ、サイレントモード、実行, 68-70
 インストーラの言語, 19
 インストーラのモード, 18
 インストーラモード, 18
 インストール
 アクセス権, 23
 依存性の確認, 20-21
 インストール後の設定, 71-82
 インストール前のチェックリスト, 24-25
 カスタムセットアップ, 58-59
 グラフィカルインタフェース, 53-63

インストール (続き)

- グラフィカルモード, 53-63
 - 言語の概要, 19
 - 言語の選択, 19
 - コンポーネント
 - 自動設定, 60-61
 - 手動設定, 62-63
 - サイレントモード, 65-70
 - トラブルシューティング, 120-121
 - サイレントモードのイベント, 65-66
 - サイレントモードプロセス, 65-66
 - サマリーレポート, 72
 - システム要件, 23
 - 自動的に設定, 60-61
 - 手動で設定, 62-63
 - 準備, 17-27
 - 設定タイプ, 19-20
 - ディスク容量要件, 23-24
 - デフォルトのセットアップ, 56-58
 - トラブルシューティング, 115-128
 - 取り消し, 63
 - プロセス, 17-23
 - メモリー要件, 23-24
 - モード, 18
- インストール後の設定, 71-82
- Access Manager, 73-74
 - Application Server, 74
 - Directory Proxy Server, 75
 - Directory Server, 75-76
 - Message Queue, 77
 - Portal Server, 77-80
 - Portal Server Secure Remote Access, 77-80
 - Service Registry, 80
 - Web Proxy Server, 80-81
 - Web Server, 81
- 確認, 83-98
- 監視, 72
 - トラブルシューティング, 116
- インストールする, サイレントモード, 65-70
- インストールのシーケンス
- ガイドライン, 30
 - 例, 30-44
- インストールの失敗, 120
- インストールのシナリオ, 29-52

- インストールの取り消し, 63
- インストールの例, 29-30
- インストール前のチェックリスト, 24-25
- インストールログファイル, トラブルシューティング, 117

お

- 応答ファイル
- 作成, 66-68
 - トラブルシューティング, 121
 - 変更, 67-68
 - 編集, 67-68

か

概要

- Java ES のアンインストール, 23
- Java ES のインストール, 19-20
- アップグレード, 21-22
- インストールの準備, 17-27
- インストールの例, 29-30
- インストールプロセス, 17-23
- 共有コンポーネント, 129-130, 130-131
- 言語の選択, 19
- コンポーネント, 129-130
- 設定タイプ, 19-20

確認

- Access Manager, 84
 - Application Server, 84-85
 - Directory Proxy Server, 86-87
 - Directory Server, 86
 - HADB, 87
 - Message Queue, 88-89
 - Portal Server, 91-92
 - Portal Server Secure Remote Access, 90-91
 - Portal Server デスクトップ, 89-90
 - Web Proxy Server, 93-94
 - Web Server, 95-98
- 確認手順, 83-98

き

共通エージェントコンテナ, デフォルトのポート, 135
共有コンポーネント、一覧, 130-131

く

グラフィカルインタフェース
 アンインストール, 110-112
 インストール, 53-63
グラフィカルモード, インストーラ、実行, 53-63

こ

コンポーネント
 アンインストール動作, 102-110
 依存性の確認, 20-21
 一覧, 18
 インストール、自動設定, 60-61
 インストール、手動設定, 62-63
 起動と停止
 Access Manager, 84
 Application Server, 84-85
 Directory Proxy Server, 86-87
 Directory Server, 86
 HADB, 87
 Message Queue, 88-89
 Portal Server, 91-92
 Portal Server Secure Remote Access, 90-91
 Portal Server デスクトップ, 89-90
 Web Proxy Server, 93-94
 Web Server, 95-98
 トラブルシューティング, 122-128
 Access Manager, 122-123
 Application Server, 123-124
 Directory Server, 124
 High Availability Session Store, 124-125
 Message Queue, 125
 Portal Server, 126-127
 Portal Server Secure Remote Access, 126
 Service Registry, 127
 Web Server, 128

コンポーネントの起動と停止

 Access Manager, 84
 Application Server, 84-85
 Directory Proxy Server, 86-87
 Directory Server, 86
 HADB, 87
 Message Queue, 88-89
 Portal Server, 91-92
 Portal Server Secure Remote Access, 90-91
 Portal Server デスクトップ, 89-90
 Web Proxy Server, 93-94
 Web Server, 95-98
コンポーネントのバージョン, 18
コンポーネントログファイル, トラブルシューティング, 117

さ

サイレントモード
 インストーラ、実行, 68-70
 インストール, 65-70
サイレントモードアンインストール, 112-113
 応答ファイルの生成, 112-113

し

システムの準備、確認, 23-24
システム要件、インストール, 23

せ

製品コンポーネント
 アンインストール, 99-113
 確認, 83-98
製品コンポーネントのアンインストール, 99-113
 設定, JVM, 82
 設定タイプ, 19-20

そ

ソフトウェア, CD または DVD, 27

た

ダウンロード, ソフトウェア, 27
単一セッションインストールの例, 30-44

て

ディスク容量要件, インストール, 23-24

と

トラブルシューティング
Access Manager, 122-123
Application Server, 123-124
Directory Server, 124
Directory Server の接続性, 116
High Availability Session Store, 124-125
Message Queue, 125
Monitoring Console, 125-126
Portal Server, 126-127
Portal Server Secure Remote Access, 126
Service Registry, 127
Web Server, 128
アンインストール, 115-128
インストール, 115-128
インストール後の設定, 116
インストールの失敗, 120
応答ファイル, 121
コンポーネント, 122-128
コンポーネントの依存関係, 118
サイレントモードインストール, 120-121
配布メディア, 116
パスワードの確認, 118
部分的なアンインストールのクリーン
アップ, 119-120
方法, 115-118
ポータルデータベースが見つからない, 121-122
リソースと設定, 116
ログファイル, 117
トラブルシューティングの方法, 115-118
トラブルシューティング方法, 115-118

は

配布内容, Windows, 25-27
配布メディア, トラブルシューティング, 116

ひ

評価インストールの例, 31-32

ふ

負荷分散, Apache Web Server, 36-37
プリロードされるソフトウェア, 27

ほ

ポート番号, インストールのデフォルト, 134-136

め

メモリー要件, インストール, 23-24

よ

用語集, リンク, 12

り

リソースと設定, トラブルシューティング, 116

れ

例

Access Manager とは別ホストの Portal
Server, 51-52
Monitoring Console, 40-41
Web とアプリケーションサービス, 49-50
インストールシーケンス, 29-30
応答ファイル, 137-138

例 (続き)

- 概要, 29-30

- 単一セッションインストール, 30-44

- 評価インストール, 31-32

ろ

- ログ, SunJavaES.log ログファイル, 22

- ログビューア, 22

- ログファイル, setup.log, 69-70

